1989

芝宮遺跡群

下芝宮遺跡 II・III

長野県佐久市長土呂下芝宮遺跡II・III発掘調査報告書

1989年3月

長野県佐久市教育委員会

例　　言

1　本書は、1988年５月20日～６月20日と、1988年12月２日～８日にわたって発掘調査した、長野県佐久市大字長土呂字下芝宮に所在する芝宮遺跡群下芝宮遺跡２次・３次の調査報告書である。

2　本調査は、林幸彦・羽毛田卓也を担当者とし、地元等多数の方々の協力を得て実施した。

3　本調査は、佐久建設事務所の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

4　本書に挿入した遺構の実測図作成には、林・羽毛田・内藤治伸・細菅ミスズ・内山克己・小間沢文代・浅沼ノブ江・橋詰信子・市川香里・渡辺久美子・高杉昌子・片井裕子・宇賀神恵・小林よしみがあたり、遺物の実測図作成は、羽毛田・内藤が担当した。また遺構のトレースは、羽毛田・細菅・小林が遺物のトレースは羽毛田他が行った。また掲載した写真は林・羽毛田が撮影した。

5　本書の執筆・編集は、羽毛田が行い、林が校閲した。

6　本書の資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

7　「遺跡の位置と環境」については1988年３月刊行の下芝宮遺跡の中で触れてあるので、重複を避ける意味から省略した。

8　発掘調査にあたり、御指導・御協力をいただいた方々に、記して厚くお礼申し上げます。
（順不同、敬称略）
笹沢浩、神村透、児玉卓丈、金井塚良一、桐原健、前原豊、川島雅人、小坂井孝修、花岡弘、丸山敞一郎、臼田武正、寺島俊郎、近藤尚義、関川尚功、川上元、木下亘、堤隆、福島邦男、田中正二郎、高村博文、三石宗一、小山岳夫、羽毛田伸博、須藤隆司、小林真寿、翠川泰弘、竹原学、木内晶義、助川朋広、島田恵子、沢田正昭、肥塚隆保、由井茂也、黒岩忠男、井出正義、宮下健司、森島稔、塩入秀敏、郷道哲章、森泉かよ子、百瀬長秀、市沢長秀、小平和夫、竹内稔、新井真博、矢島宏雄、佐藤信之、山根洋子、矢口忠良、神沢昌二郎、直井雅尚、熊谷康治、高桑俊雄、関沢聡、小林康雄、長崎元広、高林重水、小林正春、桜井弘人、山下誠一、諏訪間順、諏訪間伸、鳥居亮、片山徹、岡村渉、上村安生、田村孝、古郡正志、小島純一、清野利明

凡　　例

1　遺構の略称

H→住居址、F→掘立柱建物址、D→土坑、M→溝状遺構、T→特殊遺構

2　遺構・遺物の縮尺は挿図を参照されたい。

3　挿図中におけるスクリーントーンは下記のものをあらわす。

1）遺構　断面→斜線、カマド・焼土範囲→点、柱痕→点

2）遺物　須恵器断面→点、内面黒色研磨→点、施釉陶器釉範囲→柄

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに統一し、水糸ラインに水糸標高として明記した。

5　重複遺構は、新しいものの上端を実線で表示した。

6　写真図版中の遺物の縮尺は原則として⅓とした。

7　写真図版中の番号は、挿図番号と対応する。

8　遺物番号は簡略化し、例えば第6図4は6－4とした。

9　各一覧表の数値について、不明は－、現存値は〈 〉、推定値は（ ）とした。

10　遺物の実測は、第三角法を用いたが、適宜第三角法の応用で作図したものもある。

11　遺物胎土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修1987年度版『新版　標準土色帖』の表示に基づいた。

12　挿図中の略記号は次のとおりである。

P→ピット、S→石、断面図中のP→土器、T→炭化材、●→遺物（土器・石器）

本 文 目 次

例言

凡例

本文目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機……1

2　調査の概要……3

3　調査日誌……4

4　発掘調査の方法……5

第Ⅱ章　層序……6

第Ⅲ章　遺構と遺物

1　住居址

1）Ｈ３号住居址……7

2）Ｈ４号住居址……10

3）Ｈ５号住居址……16

4）Ｈ６号住居址……23

2　掘立柱建物址

1）Ｆ２号掘立柱建物址……34

2）Ｆ３号掘立柱建物址……37

3）Ｆ４号掘立柱建物址……38

4）Ｆ５号掘立柱建物址……40

5）Ｆ６号掘立柱建物址……40

3　土坑

1）Ｄ８号土坑……41

2）Ｄ９号土坑……42

3）Ｄ10号土坑……44

4）Ｄ11号土坑……44

5）Ｄ12号土坑……45

4　溝状遺構

1）Ｍ２号溝状遺構……47

2）M５号溝状遺構……48
3）M６号溝状遺構……49
4）M７号溝状遺構……53
5）M８号溝状遺構……53
6）M９号溝状遺構……54
7）M10号溝状遺構……55
8）M11号溝状遺構……59
5　特殊遺構
1）Ｔ１号特殊遺構……59
6　その他
1）グリッド及び表採遺物……61
2）Ｈ７号住居址……62
第Ⅳ章　総括……63
参考文献
写真図版

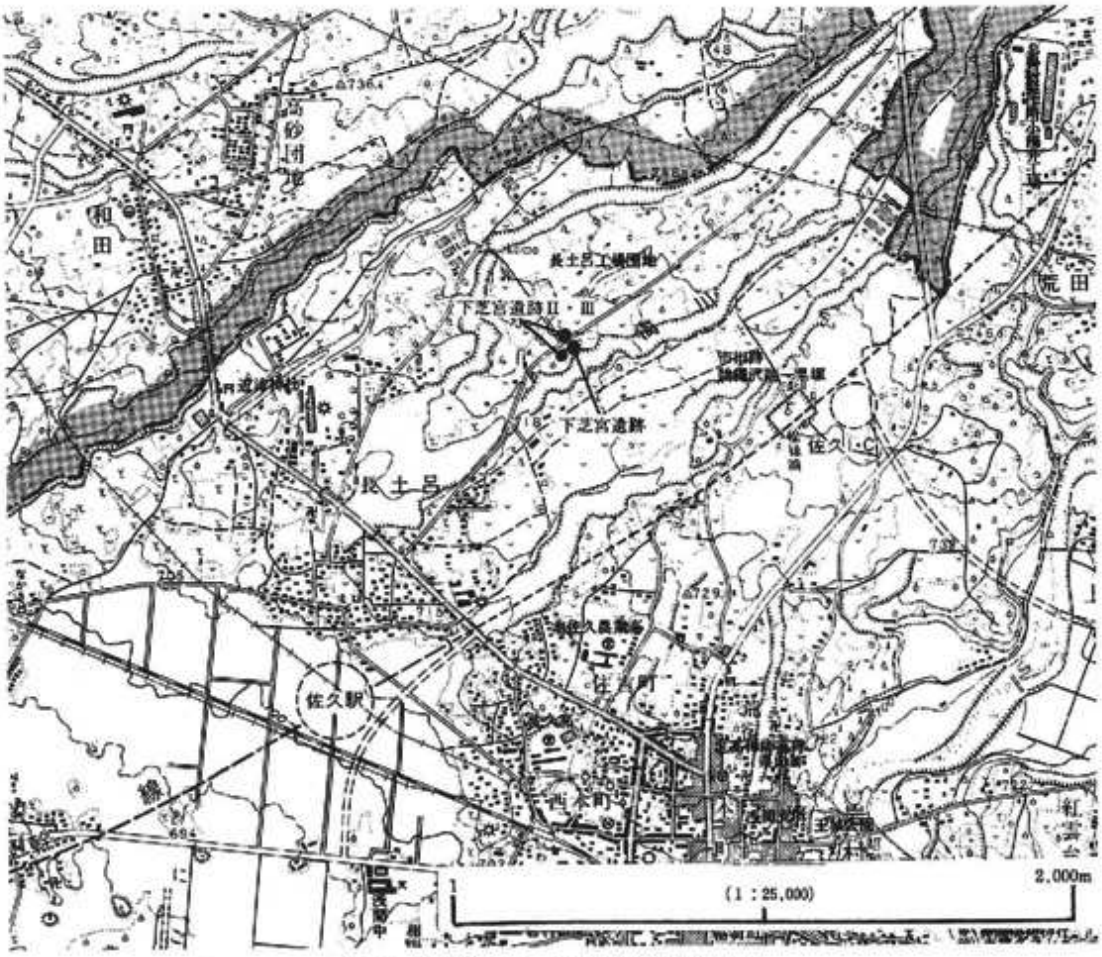
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

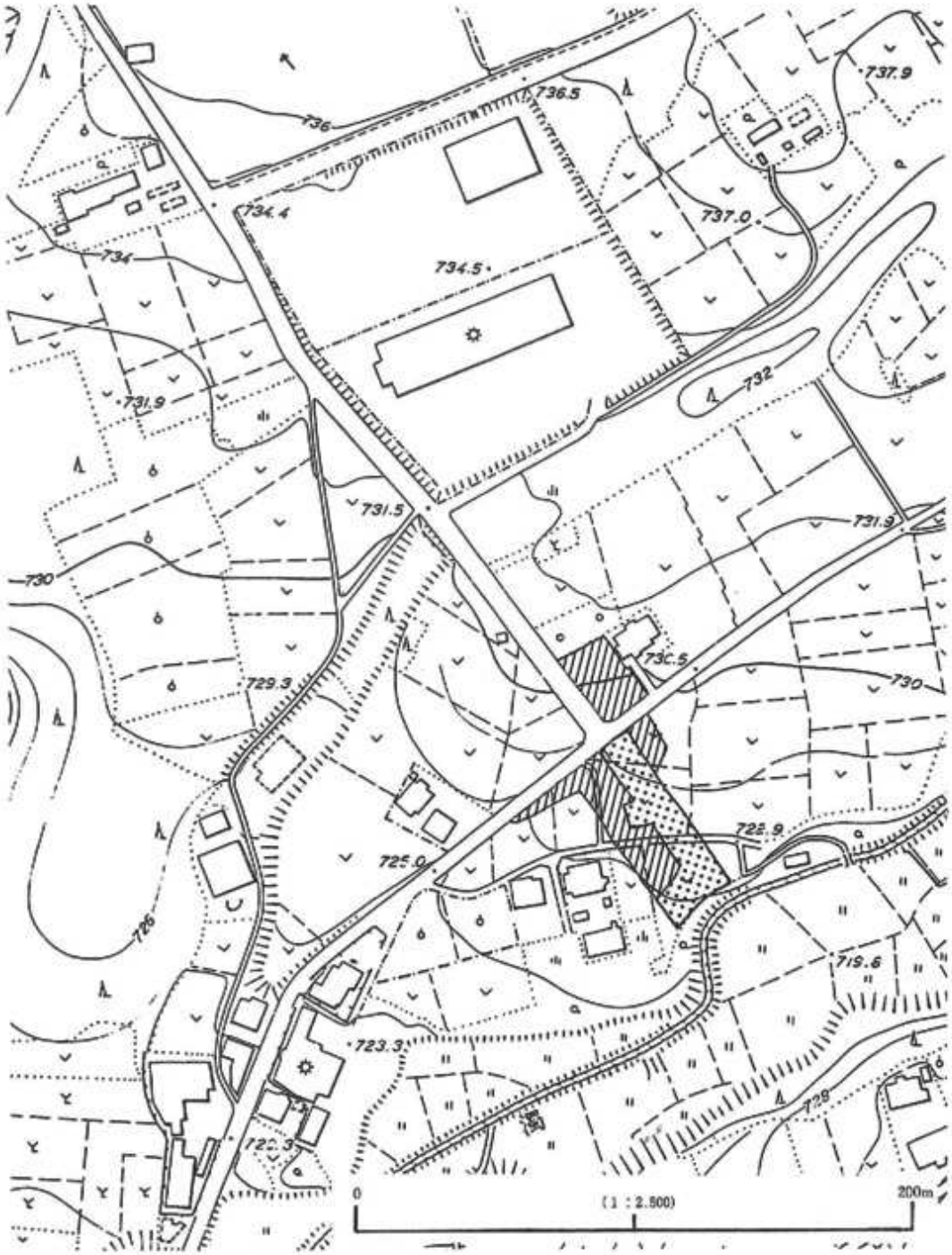
芝宮遺跡群は、佐久市大字長土呂・小田井に所在し、浅間山に源を発する濁川の浸蝕による田切地形の北側、標高720m～760mの段丘上に展開する大遺跡群である。下芝宮遺跡は、本遺跡群の南西端に存在する。

今回、佐久建設事務所が行う道路改良事業（路線名141線）に伴い、同事務所と佐久市教育委員会とで協議の結果、本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで佐久建設事務所より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査する運びとなった。

（事務局）



第1図　下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ位置図（1：25,000）



第2図　下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ位置図（1：2,500）

2　調査の概要

遺跡名　　芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ

所在地　　長野県佐久市大字長土呂字下芝宮812－2・南下中原751他

発掘・整理期間　　1988年5月20日～1989年3月31日

調査団の構成

〔事務局〕

教育長　　大井昭二

教育次長　　茂木多喜男

社会教育課長　　北沢　馨

　　相沢幸男（社会教育課主幹・1988年10月就任）

社会教育係長　　小平　実

社会教育係　　東城公人、小林正衛（1988年12月就任）、林　幸彦、荻原一馬、山浦俊彦

　　羽毛田卓也、田村和広

　　市村美咲（1988年9月退任）、五十嵐孝子（1988年10月就任、同年12月退任）

　　荻原香代子（1989年1月就任）、岩崎こずえ（1989年2月就任）

社会教育指導員　　三石和子（1988年8月退任）

〔調査団〕

調査団長　　白倉盛男

調査副団長　　藤沢平治

調査担当　　林　幸彦、羽毛田卓也

調査主任　　佐々木宗昭

調査員　　井上行雄、大井今朝太

調査補助員　　浅沼ノブ江、市川香里、井出百合子、宇賀神恵、遠藤しづか、大井恵美子、

　　片井裕子、金森治代、木島美子、堺　益子、高杉昌子、田中夏江、内藤治伸、

　　並木ことみ、橋詰勝子、橋詰けさよ、橋詰信子、星野良子、細菅ミスズ、

　　山崎平八郎、和久井義雄、渡辺久美子

参加者（順不同）　内山克己、小間沢文代、小林よしみ、浅田務、森泉秀夫、角谷春江、堀篭因、篠原悟、菊地ともえ、篠崎昭二、依田みち、早川光彦、並木吉三郎、中山正三郎、青柳博、佐藤紫郎、小林光枝、高橋きくえ

3　調査日誌

○1988年5月18日～5月19日

調査区域の確認と打ち合せを現地にて行う。

○1988年5月20日～5月21日

テント設営、機材の搬入を行う。

○1988年5月20日～5月24日

重機による表土剝ぎを行う。（Ⅱ地区）

○1988年5月20日～5月27日

遺構確認のための精査を行う。（Ⅱ地区）

○1988年5月21日～

遺構の掘下を開始する。（Ⅱ地区）

○1988年6月1日

グリッドの設定、実測を開始する。（Ⅱ地区）

○1988年7月4日

Ⅱ地区の作業が終了する。

○1988年8月3日～8月4日

Ⅱ地区の航空測量・航空写真撮影を行う。

○1988年12月2日

Ⅲ地区の作業を開始する。

○1988年12月8日

Ⅲ地区の作業が終了する。

○1988年12月～

遺物の注記・水洗・復原作業を開始する。

○1989年1月～

図面修正・トレス、遺物の実測・トレス作業を開始する。

○1989年2月～3月

遺物写真撮影、原稿執筆・編集作業を行う。

4　発掘調査の方法

本遺跡の調査を実施するにあたり、基本的な調査方法を次のような確認事項をもって実施した。

1　調査はグリッド方式で行う。発掘区全体を５ｍ×５ｍの方眼に組み、東西ラインを数列とし、東より１・２・３……、南北ラインは南からあ・い・う……の順で番号をつけ、各グリッドの南東交点をそのグリッド名とした。

2　住居址はⅠ～Ⅳの４区に分割し、その東西・南北ラインで土層断面図を実測した。

3　カマドは原則として４分割し、主軸ラインで土層断面図を、袖に直交するラインで横断図を実測した。

4　土坑は２分割して調査を行った。

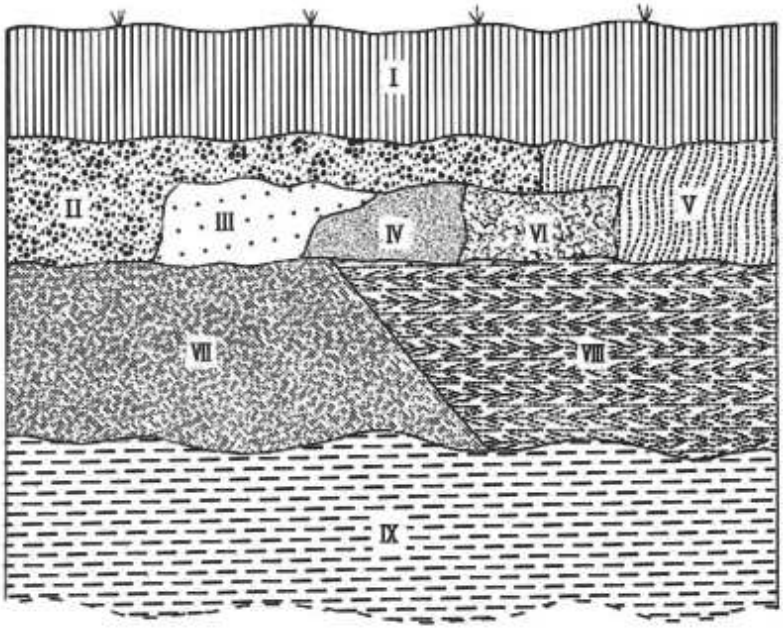
5　溝は全調査を原則としたが、随時トレンチ調査を併用した。

6　土層は、『新版　標準土色帖』で土色を決定し、粘性と含有物を観察した。

7　住居址内の出土遺物は、原則として各層ごとに位置と標高を記録した。

8　住居址の全体写真撮影は南側より行った。

第Ⅱ章　層序



第３図　層序模式図

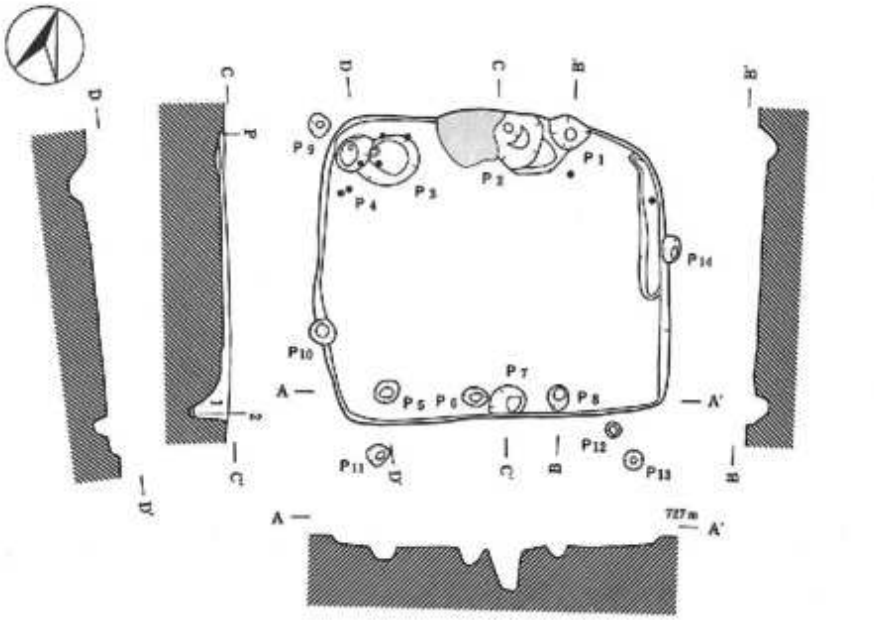
下芝宮遺跡は、海抜標高728m～730mを測り、南西方向に向ってやや不規則に傾斜する。基本層序は、調査区第Ⅱ区の西側と第Ⅲ区の東側において観察した。

第Ⅰ層は、耕作による影響下で成立した粘性がやや弱い黒褐色土、第Ⅱ層は、粘性が弱くパミス小粒を少量含む黒褐色土、第Ⅲ層は粘性が弱くパミス小粒を微量含むにぶい黄褐色土、第Ⅳ層は、粘性が弱くパミス小粒を少量含むにぶい黄褐色土、第Ⅴ層は、粘性がやや弱くパミス小粒とローム粒子を少量含む褐色土、第Ⅵ層は、粘性がやや弱く、パミス小を少量とローム粒子をやや多量に含む黄褐色土、第Ⅶ層は、パミス極大～小粒を多量に含むローム主体の明黄褐色土、第Ⅷは、パミス大～小粒と砂粒・砂礫を多量に含む暗褐色土、第Ⅸ層は、パミス大粒～小粒と砂礫・スコリアを多量に含むにぶい黄橙色土である。

第Ⅲ章　遺構と遺物

1　住居址

1）Ｈ３号住居址



1　黒褐色土層　粘性弱し。ローム粒子と炭化粒子を少量含む。
2　暗褐色土層　粘性弱し。パミス・ローム粒子を含む。

0　(1：80)　2m

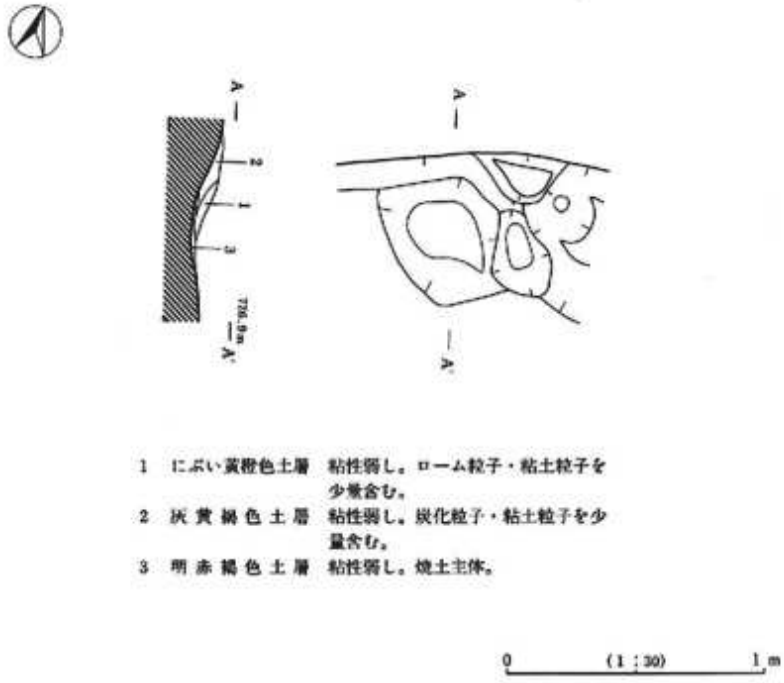
第４図　Ｈ３号住居址実測図

Ｈ３号住居址は、調査区第Ⅱ区中央やや南よりのか－７・８グリッド内に位置し、全体層序第Ⅷ層上面において単独で検出された。

平面形態は、南北309cm、東西366cmを測り、東西にやや長い方形を呈している。主軸方位はN－16°－Wを指す。

覆土は２層に分割された。第１層は粘性が弱く、ローム粒子と炭化粒子を少量含む黒褐色土で、第２層は粘性が弱く、パミスとローム粒子を少量含む褐色土層である。

確認面からの壁残高は、８～13cmを測り、壁面は平滑であるがやや軟質である。床面は平坦で

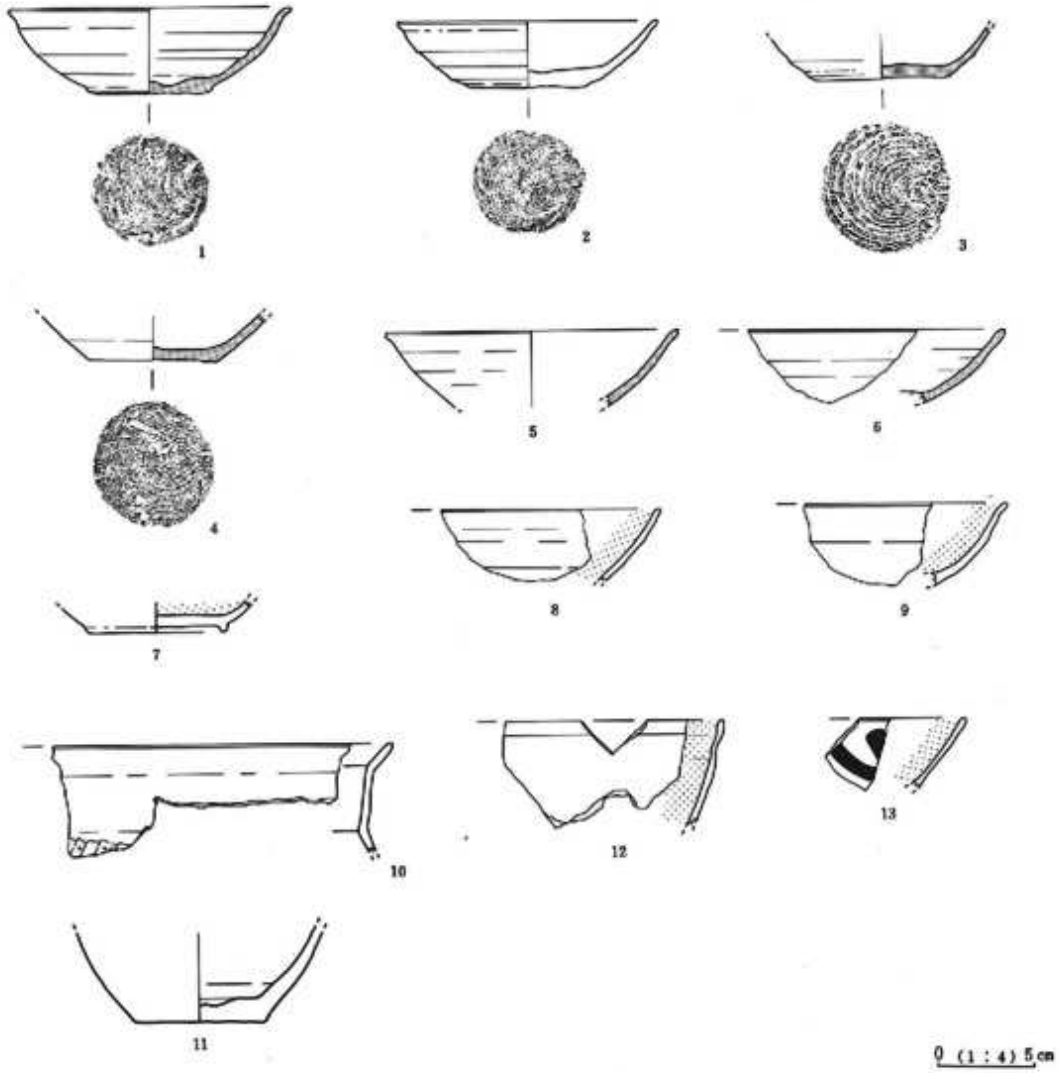


第5図　H3号住居址カマド実測図

固くしまっており、貼床は認められなかった。なお床面積は9.77㎡を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、各コーナーは丸味を持っている。

ピットは、床面で8個（P_1～P_8）、壁中に1個（P_{10}）、壁外に5個（P_9・P_{11}～P_{14}）の計14個が検出された。P_1は径43cm×33cmで床面からの深さ9.5cm、確認面からの深さ21cm、P_2は径46cm×58cmで深さ16.5cm、P_3は径50cm×54cmで深さ11cm、P_4は径33cm×46cmで深さ19cm、P_5は径27cm×25cmで深さ16cm、P_6は径20cm×28cmで深さ19cm、P_7は径34cm×41cmで深さ43cm、P_8は径22cm×27cmで深さ12cm、P_9は径22cm×25cmで確認面からの深さ30.5cm、P_{10}は径26cm×28cmで確認面からの深さ31cm、床面からの深さ19cm、P_{11}は径19cm×25cmで確認面からの深さ19.5cm、P_{12}は径16cm×15cmで確認面からの深さ18cm、P_{13}は径20cm×21cmで確認面からの深さ19cm、P_{14}は径19cm×28cmで確認面からの深さ12cmを測る。主たる柱間はP_3－P_5で242cm、P_5－P_8で180cmを測る。

カマドは北壁中央よりやや西寄りで検出された。残存状況は極めて悪く、東袖の一部と火床部が残るのみだった。規模は、残存する火床部が南北50cmで東西で47cm、東袖が長さ18cmで高さ6.5cmを測る。覆土は3層に分割された。第1層は粘性が弱く、ローム粒子と粘土粒子を少量含むにぶい黄橙色土、第2層は粘性が弱く、炭化粒子と粘土粒子を少量含む灰黄褐色土、第3層は粘性が弱く、焼土主体の明赤褐色土である。第1層は袖部の崩れ出した層で、第2層は煙道部の覆



第6図　H3号住居址出土遺物実測図

土と考えられる。なお火床部には掘方が認められなかった。

遺物は、土師器の甕・坏・鉢と須恵器の甕・坏が出土している。6－10・11は土師器の甕だが別個体である。6－10は頸部が「コ」の字を呈する。6－2・7～9・13は土師器の坏である。6－2以外は全て内面黒色で、6－13は判読不能だが墨書が認められた。なお6－2は底部が回転糸切りで、6－7はケズリ出しの高台が付される。6－1・3～6は須恵器の坏である。6－1・3・4は底部が回転糸切りである。なお体部が内彎気味に外傾し、口縁端部で外反する傾向が窺れる。6－12は土師器の鉢と考えられる。内外面にロクロヨコナデが施され、内面は黒色である。

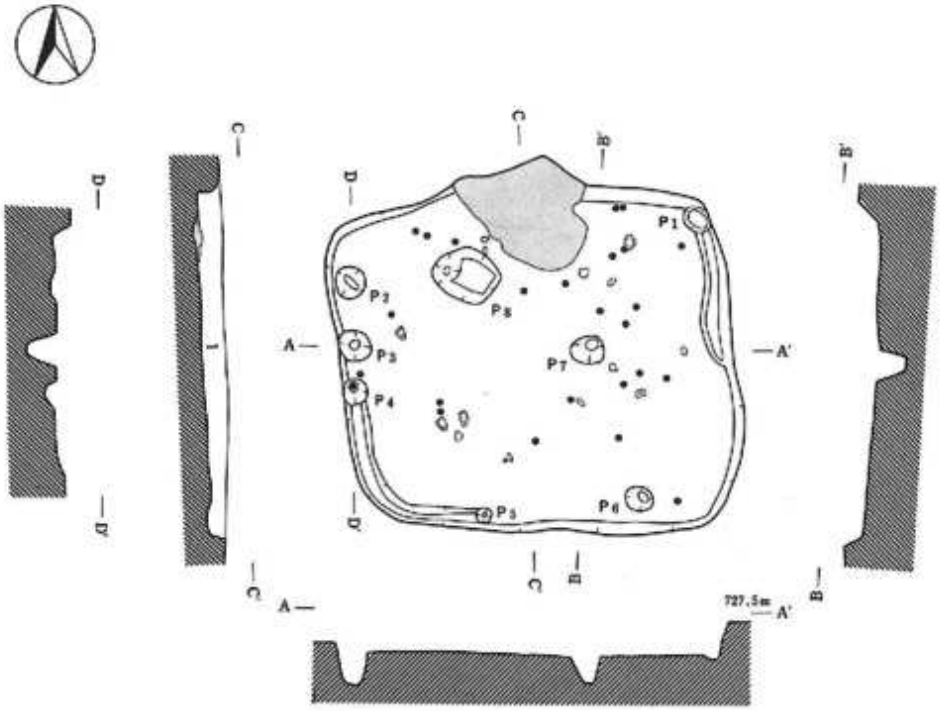
以上より本住居址は、平安時代の前半に位置付けられる。

第1表　H3号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
6－1	坏（須）	口径14.2 底径6.2 器高4.4	体部内彎気味に外傾し、口辺部でやや外反 底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	5Y7/2～5/1
6－2	坏	口径（13.25） 底径6.1 器高3.4	体部直線的に外傾 底部回転糸切り	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ	外5YR5/8 内7.5YR4/2
6－3	坏（須）	底径6.8 器高〈2.3〉	底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	2.5Y2/1～3/1
6－4	坏（須）	底径6.55 現高2.5	底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	10YR6/3～6/1
6－5	坏（須）	口径（14.85） 現高3.9		内外面ロクロヨコナデ	2.5Y6/1～6/2
6－6	坏（須）			内外面ロクロヨコナデ	5Y5/1
6－7	坏	台径6.8 現高1.65	ケズリ出し高台	内面ヘラミガキ・黒色 外面ヘラナデ・ヘラミガキ	外5YR4/8
6－8	坏			外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外5YR5/6
6－9	坏			外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外7.5YR5/6
6－10	甕	口径（24.9）	頸部「コ」の字を呈する	口辺内外面ロクロヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ	10YR5/6～5/4
6－11	甕	底径6.1 現高4.9	底径回転糸切り後ヘラナデ	内外面ロクロヨコナデ	7.5YR4/6
6－12	鉢			内外面ロクロヨコナデ 内面黒色	外10YR5/6
6－13	坏			外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外7.5YR5/6 墨書

2）H4号住居址

H4号住居址は、調査地第Ⅱ区南側、お・か－6・7グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において単独で検出された。



1　黒褐色土層　粘性弱し。パミス（小粒－中粒）・炭化粒子を少量、ローム粒子を微量含む。

0　(1：80)　2 m

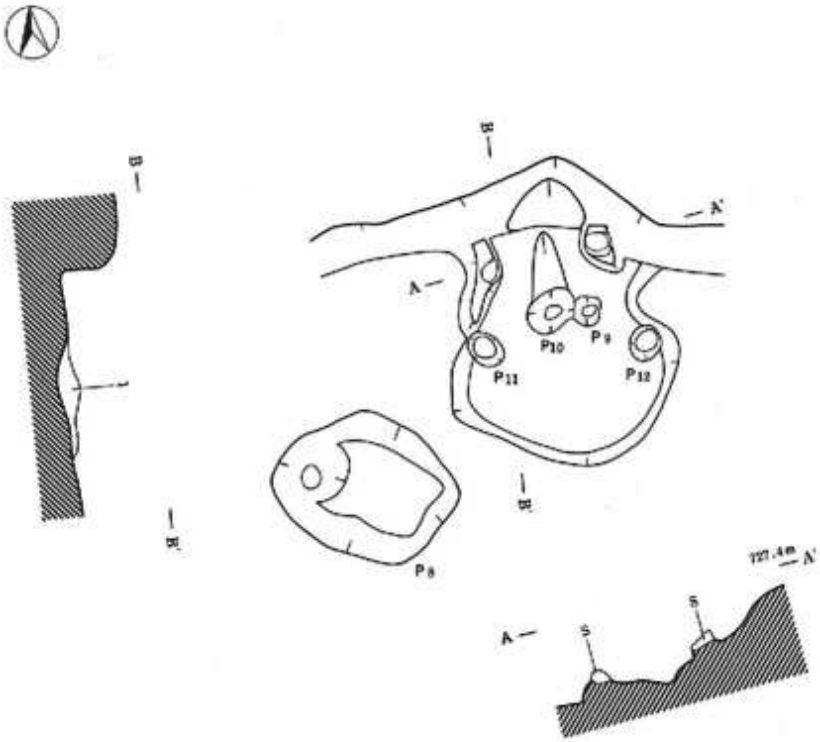
第7図　H4号住居址実測図

平面形態は、南北383 cm、東西420 cmを測り、東西にやや長い方形を呈している。主軸方位はN－6°－Wを指す。

覆土は、粘性が弱く、パミス（小粒～中粒）・炭化粒子を少量、ローム粒子を微量含む黒褐色土の1層のみ確認された。

確認面からの壁残高は3～36cmを測り、壁面は平滑で比較的堅固である。床面は平坦で固くしまっており、貼床は認められなかった。なお床面積は12.03 ㎡を測る。また壁はほぼ垂直に立ち上がり、各コーナーは丸味を持っている。

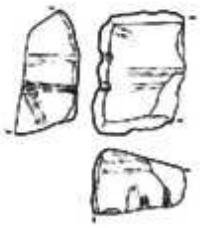
ピットは、床面で7個（P_2～P_8）、壁中に1個（P_1）の計8個が検出された。P_1は径25cm×32cmで床面からの深さ15cm、確認面からの深さ50cm、P_2は径31cm×33cmで深さ8cm、P_3は径33cm×35cmで深さ32cm、P_4は径25cm×28cmで深さ14cm、P_5は径16cm×17cmで深さ9.5cm、P_6は径25cm×29cmで深さ21.5cm、P_7は径28cm×35cmで深さ30cm、P_8は径54cm×74cmで深さ11cmを測る。なおP_8は検出位置・覆土の状態より灰落しと考えられる。また主たる柱間は、P_1－P_2間で364 cm、P_1－P_6間



1　黒褐色土層　粘性弱し。炭化粒子・焼土粒子を微量含む。

0　(1：30)　1m

第8図　H4号住居址カマド実測図



0　(2：3)　2cm

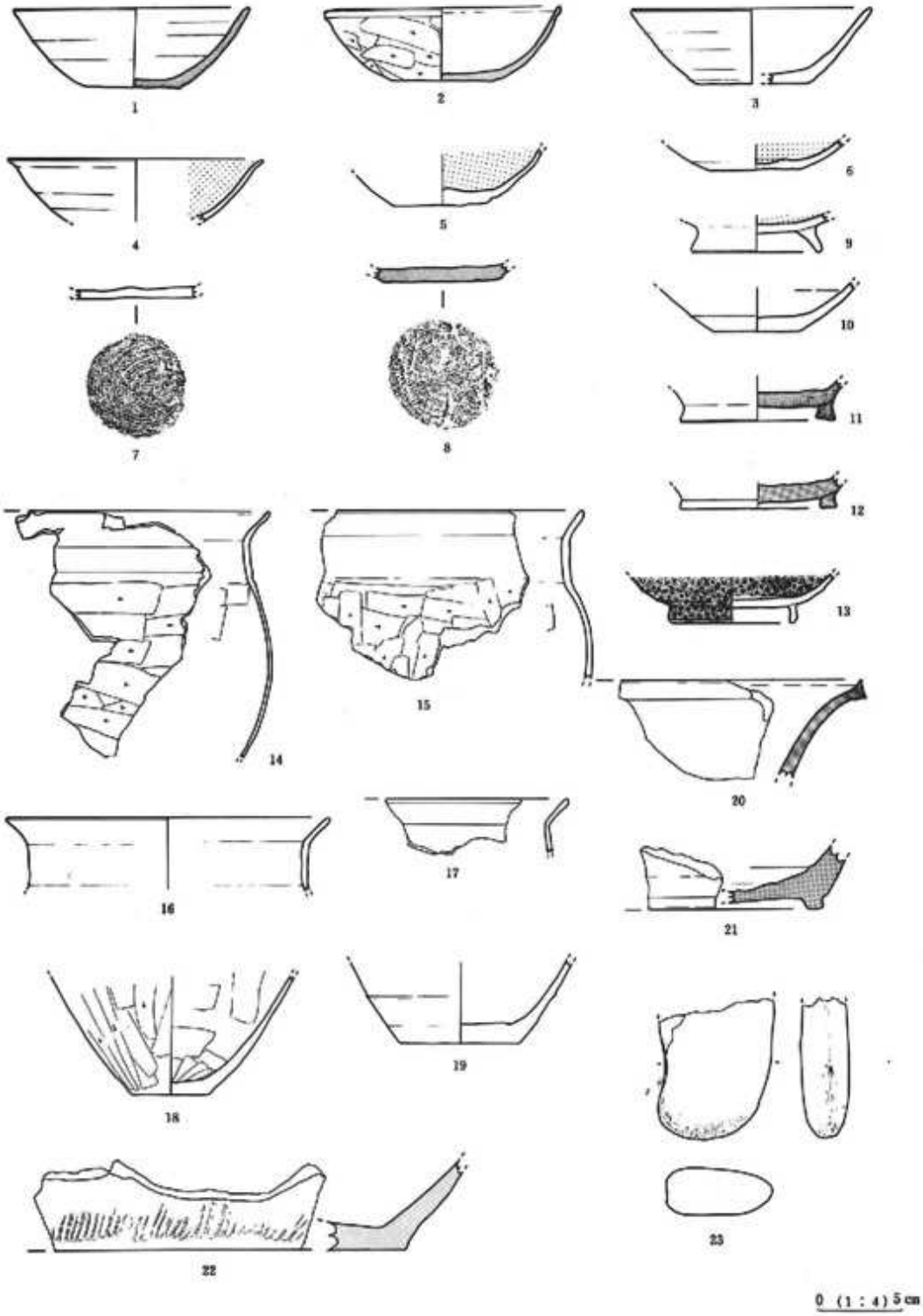
第9図　H4号住居址出土
砥石実測図

第2表　H4号住居址出土砥石一覧表

器種	石質	法量 cm			備考
		厚さ	巾	長さ	
砥石	砂岩	〈2.5〉	4.6	〈3.3〉	有溝砥石

で293cmを測る。

カマドは北壁中央より検出された。残存状況は極めて悪く、東西両袖の一部と火床部の掘り込みが残るのみである。残存する袖の規模は、東袖が長さ20cm・巾14cm・高さ9cm、西袖が長さ39



第10図　H 4 号住居址出土遺物実測図

第3表　H4号住居址出土遺物一覧表(1)

挿図番号	機種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
10—1	坏（須）	口径13.25 底径5.6 器高4.65	体部内彎気味に外傾 底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	外2.5Y6/2 内2.5Y3/1
10—2	坏（須）	口径13.85 底径5.9 器高4.3	体部内彎気味に外傾 底部手持ヘラケズリ	体部外面ヘラケズリ 内面ロクロヨコナデ	5Y6/1
10—3	坏	口径（14.0） 底径（6.4） 器高4.4	体部直線的に外傾 底部回転糸切り	内外面ヨコナデ	10YR1.7/1 ～4/6
10—4	坏	口径（15.0）	体部内彎気味に外傾 口縁端部外反	外面ヨコナデ 外面横位のヘラミガキ・黒色	外10YR6/6
10—5	坏	底径（5.5） 現高3.2		外面ロクロヨコナデ 底部ヘラナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外10YR4/6
10—6	坏	底径（5.35） 現高1.7	底部回転糸切り	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外7.5YR5/8
10—7	坏	底径（7.2）	底部回転糸切り	内面ヘラミガキ・黒色	
10—8	坏（須）	底径7.1		底部回転ヘラケズリ	10YR4/1
10—9	坏	台径7.4 台高1.2	貼付高台	内面ヘラミガキ・黒色	10YR5/4
10—10	坏	底径5.1	底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	10YR5/6
10—11	壺（須）	底径9.0	貼付高台	底部回転ヘラケズリ	10YR5/1
10—12	壺（須）	底径9.1	貼付高台	底部回転ヘラケズリ	10Y5/1
10—13	坏（灰）	台径7.4 台高0.9	貼付高台	底部回転ヘラケズリ 外面ヘラケズリ	
10—14	甕		頸部「コ」の字	口縁・頸部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ	5YR5/4 ～2/4
10—15	甕	口径（17.5）	頸部「コ」の字	口縁・頸部内外面ヨコナデ 胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ	10YR5/4
10—16	甕	口径（18.9）	頸部「コ」の字	口縁・頸部内外面ヨコナデ	5YR5/6

第4表　H4号住居址出土遺物一覧表(2)

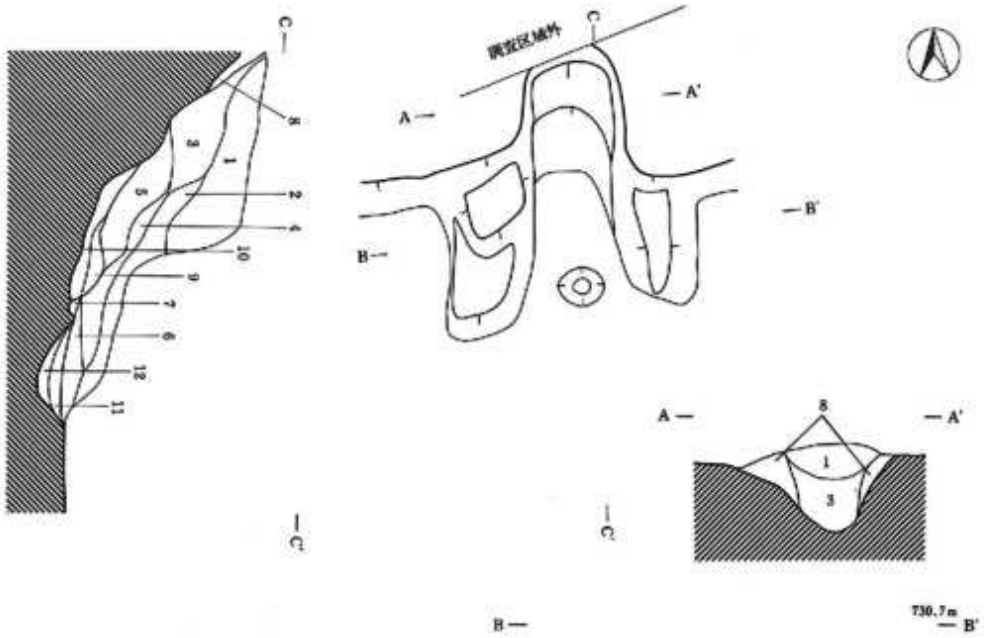
挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
10—17	甕		頸部「コ」の字	内外面ロクロヨコナデ	5YR4/8
10—18	甕	底径4.6 現高7.0		内面ヘラナデ 外面ヘラケズリ	10YR4/4
10—19	甕	底径7.0 現高4.7		外面ロクロヨコナデ 底部外面ナデ 内面ナデ	7.5YR4/4
10—20	甕 (須)			内外面ロクロヨコナデ	外10Y3/1 内10Y6/1
10—21	壺 (須)		貼付高台 底部回転糸切り	内外面ロクロヨコナデ	内5Y5/1 外5YR3/2-5/2
10—22	甕 (須)			外面タタキ 内面ヘラナデ	5YR3/2
10—23	敲石	現長8.2・巾6.7・厚さ2.75		安山岩、周縁に敲打痕	

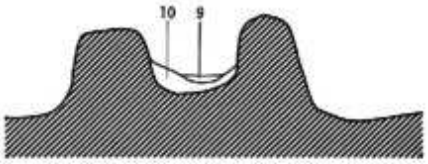
cm・巾14cm・高さ6cmを測る。また両袖の巾は59cmを測る。残存する煙道部から焚口までは117cmを測り、煙道部は巾82cm・長さ23cmの規模で壁体を掘り込んでいる。覆土は、粘性が弱く、炭化粒子と焼土粒子を微量含む黒褐色土の1層のみが確認された。P_9とP_{10}は支脚用に掘られたピットと考えられ。P_{11}とP_{12}は袖石を固定するために掘られたピットと考えられる。なお、両袖に補強材としての安山岩が2個確認された。なお掘り方は認められなかった。

遺物は、土師器の甕・坏と須恵器の甕・壺・坏、灰釉陶器の坏、敲石、砥石等が出土している。10－14～19は土師器の甕で、14～17は頸部が「コ」の字を呈する。なお19はロクロ成形のみでヘラケズリは行れていない。10－3～7・9・10は土師器の坏である。10以外は全て内面黒色で、6・7・10は底部回転糸切りが行れる。また9は底部に高台が付される。10－20・22は須恵器の甕で、22は外面にタタキが施される。10－11・12・21は須恵器の壺の底部と考えられる。10－1・2・8は須恵器の坏で、2は底部に手持ちヘラケズリが、8は回転ヘラケズリが施される。10－13は灰釉陶器の坏で、底部に回転ヘラケズリの後、高台が付される。9図は砂岩製の砥石で、欠損面を除く5面が使用されている。10－23は安山岩製の敲石である。

以上より本住居址は、平安時代の前半に位置付けられる。

3）Ｈ５号住居址

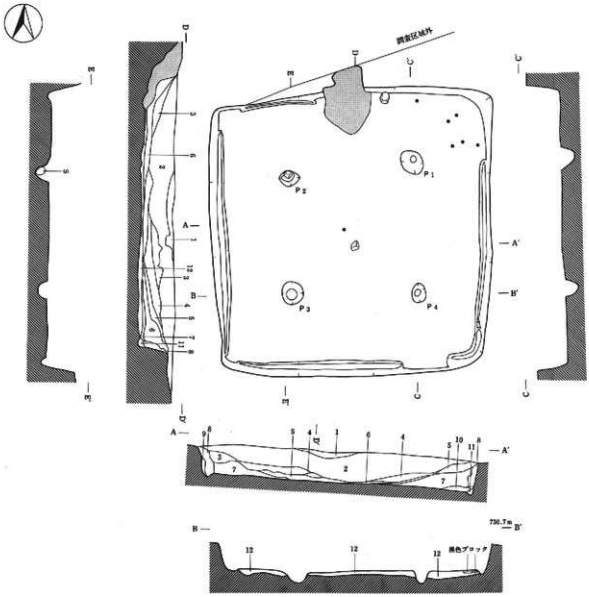




1　灰褐色土層　粘性弱し。パミス大粒とローム粒子を少量含む。
2　にぶい黄褐色土層　粘性やや弱し。パミス大粒とローム粒子・粘土粒子を少量含む。
3　暗褐色土層　粘性弱し。パミス極大粒と焼土粒子を微量含む。
4　灰赤色土層　粘性やや弱し。焼土粒子・炭化粒子を多量に含む。
5　赤色土層　粘性やや強し。焼土粒子を多量に含む。
6　暗赤灰色土層　粘性やや強し。焼土粒子・炭化粒子を多量に含む。
7　にぶい褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を少量・焼土粒子を微量含む。
8　灰褐色土層　粘性やや弱し。パミス小粒・ローム粒子・粘土粒子を少量含む。
9　褐灰色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・粘土粒子を少量含む。
10　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。
11　灰黄褐色土層　粘性弱し。パミス極小粒・ローム粒子・粘土粒子を微量含む。
12　明黄褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量に含む。

0　(1：30)　1m

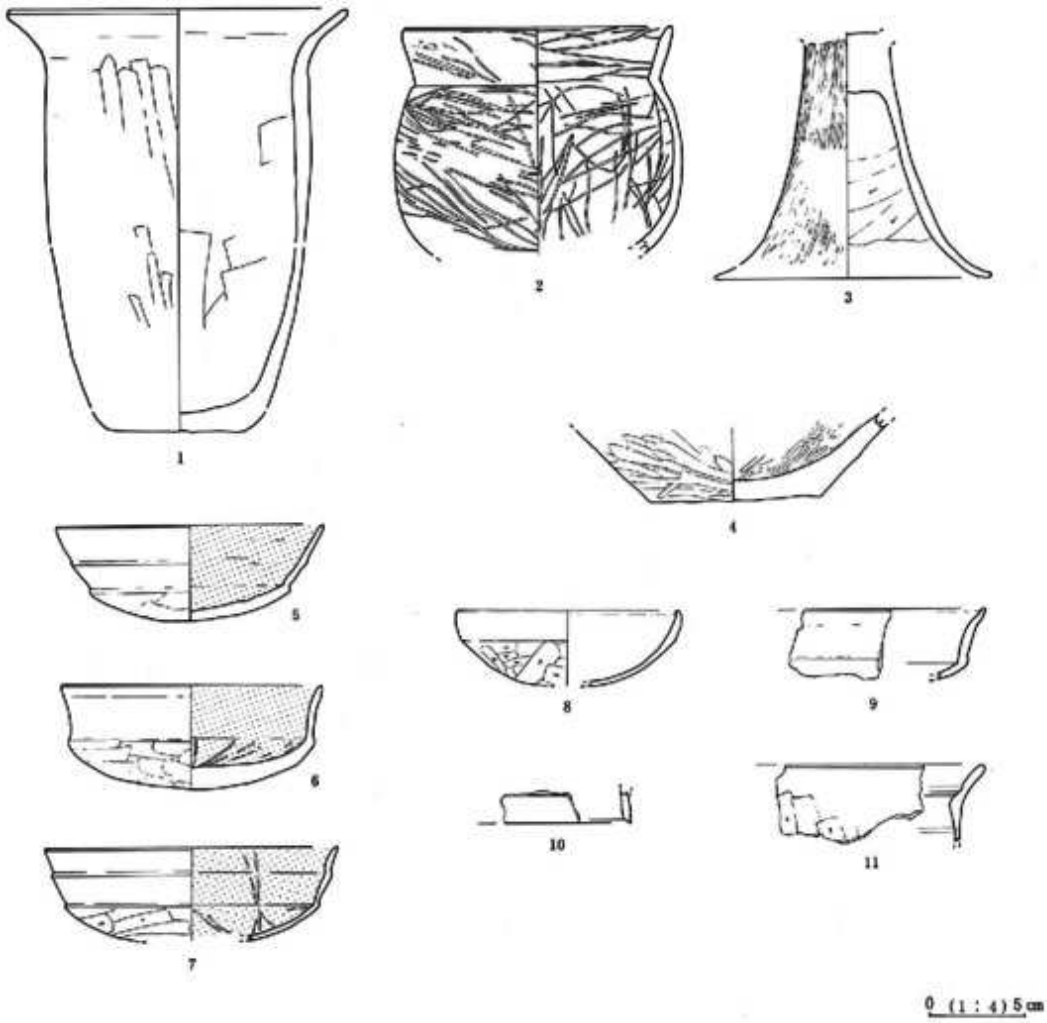
第11図　Ｈ５号住居址カマド実測図



1　暗褐色土層　粘性弱し。パミス小粒を少量含む。
2　黒褐色土層　粘性やや強し。パミス大粒・炭化粒子を微量含む。
3　暗褐色土層　粘性弱し。パミス中粒を微量含む。
4　褐色土層　粘性やや強し。パミス極小・ローム粒子を少量含む。
5　褐色土層　粘性やや強し。パミス小粒を微量含む。
6　黒褐色土層　粘性やや強し。パミス小粒・炭化粒子を微量含む。
7　黄褐色土層　粘性やや強し。パミス極小・ローム粒子を少量含む。
8　黒褐色土層　粘性弱し。パミス大粒を微量含む。
9　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量含む。
10　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子をやや多量、パミス中粒を少量含む。
11　黄褐色土層　粘性弱し。ローム主体。
12　明褐色土層　粘性やや弱し。パミス中粒を少量、ローム粒子を多量に含む。

0　(1：80)　2m

第12図　H５号住居址実測図

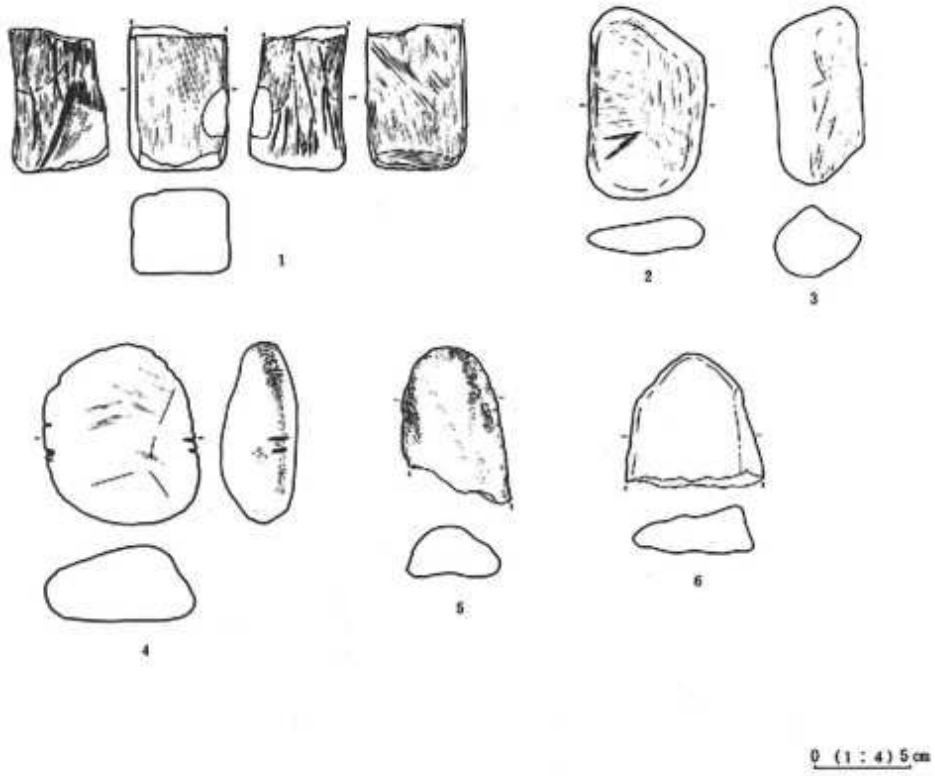


第13図　Ｈ５号住居址出土遺物実測図（１）

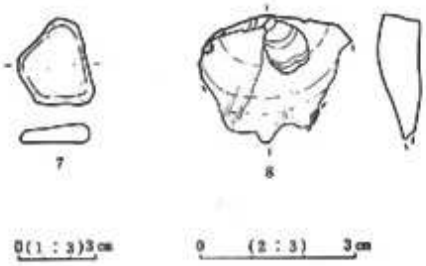
Ｈ５号住居址は、調査区第Ⅲ区北側、と・な－９・10グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。

平面形態は、南北650cm、東西595cmを測り、カマドの部分を除いた場合、南北にやや長い方形を呈する。主軸方位はＮ－７°－Ｗを指す。

覆土は11層に分割された。第１層は粘性が弱く、パミス小粒を含む暗褐色土、第２層は粘性がやや強く、パミス大粒と炭化粒子を微量含む黒褐色土、第３層は粘性弱く、パミス中粒を微量含む暗褐色土、第４層は粘性がやや強く、パミス極小粒とローム粒子を少量含む褐色土、第５層は粘性がやや強く、パミス小粒を微量含む褐色土、第６層は粘性がやや強く、パミス小粒と炭化粒子を微量含む黒褐色土、第７層は粘性がやや強く、パミス極小粒とローム粒子を少量含む黄褐色



第14図　H５号住居址出土遺物実測図（２）



第15図　H５号住居址出土遺物実測図（３）

第５表　H５号住居址出土遺物一覧表(1)

挿図番号	器種	法量 cm			備考
		長さ	巾	厚さ	
15－7	磨石	3.3	2.7	0.7	安山岩
15－8	スクレパー	(2.4)	(2.9)	0.8	黒曜石 刃部欠損

土、第８層は粘性が弱く、パミス大粒を微量含む黒褐色土、第９層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む褐色土、第10層は粘性が弱く、ローム粒子をやや多量に、パミス中粒を少量含む褐色土、第11層は粘性が弱くローム主体の黄褐色土である。

ピットは主柱穴の４個（P_1～P_4）が確認された。P_1は径45cm～57cmで深さ30.5cm、P_2は径34cm×45cmで深さ29cm、P_3は径46cm×48cmで深さ26.5cm、P_4は径31cm×42cmで深さ28.5cmを測る。主

たる柱間は、P_1-P_2間で271cm、P_2-P_3間で248cmを測る。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁残高は56.5cm～77.5cmを測る。壁体は全体層序第Ⅶ層の明黄褐色土を利用し、平滑で堅固である。床面は平坦で、粘性がやや弱く、パミス中粒を少量とローム粒子を多量に含む明褐色土（第12層）により貼られた。やや緻密さに欠けるが固く締まった貼床が確認された。なお床面積は29.91㎡を測る。また、北壁東側・南壁東側の一部・北西コーナーを除く全周に、深さ2cm～11cmの周溝が確認された。

第6表　H5号住居址出土遺物一覧表(2)

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
13－1	甕	口径（17.2） 底径（6.7） 器高（21.6）	小型長胴甕 最大径を口縁に持つ	胴部外面・内面ヘラナデ 口縁部内外面ヘラナデ	5YR2/1 ～5/6
13－2	甕	口径（13.6） 現高11.7	小型球胴甕 口縁直線的に外傾	口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、胴部内面ヘラナデ後ヘラミガキ	7.5YR6/6 ～5/1
13－3	高坏	脚口径(14.1) 現高12.6	脚部ラッパ状に開く	脚部外面ヘラミガキ 脚部内面ヘラケズリ 坏部内面ヘラナデ・黒色	7.5YR5/6
13－4	甕	底径（8.7）	球胴甕	胴部・底部外面ヘラミガキ 胴内面ヘラケズリ後ヘラミガキ	10YR4/6 ～5/4
13－5	坏	口径13.7 器高4.9	体下部・中央に外稜 外稜より直線的に外傾	体部内外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ、内面黒色	10YR6/4
13－6	坏	口径13.4 器高5.4	体部に外稜	体部外面ヨコナデ（外稜上） 体・底部外面ヘラケズリ 体部内面ヨコナデ・黒色 底部内面ヘラミガキ（暗文風）	10YR6/4 〃　5/1
13－7	坏	口径(15.0)	体下部に外稜	体部外面ヨコナデ（外稜上） 体・底部外面ヘラケズリ 内面ナデ後ヘラミガキ・黒色	10YR5/6 〃　1.7/1
13－8	坏	口径(11.4) 器高3.9		口辺部外面ヨコナデ 体部・底部外面ヘラケズリ 内面ヨコナデ	内10YR5/6 ～6/3 外10YR6/4
13－9	坏		体下部に外稜	内外面ヨコナデ	5YR5/8
13－10	坏蓋			内外面ヨコナデ	10YR4/3
13－11	甕			口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ	10YR6/4
19－1	甕	口径（17.4） 底径（5.7） 器高31.5	やや丸味を持った長胴 口縁は直線的に外傾 底部にヘラ記号	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	内7.5YR6/3 外7.5YR5/3

カマドは北壁中心において検出された。残存状況は比較的良好だが、天井部は崩落し、天井石と袖石も残存していなかった。また袖石は、燃焼部と焚口との位置関係から存在しただろうと考えられる。現存する規模は、焚口より煙道部まで146cm、袖部の巾が98cmを測る。現存する東側の袖は、長さ51cm・巾33cm・高さ13.5cm～41cm、西側の袖は、長さ67cm・巾33cm・高さ15cm～37.5cmを測る。覆土は7層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミス大粒とローム粒子を少量含む灰褐色土、第2層は粘性がやや弱く、パミス大粒とローム粒子・粘土粒子を少量含むにぶい黄褐色土、第3層は粘性が弱く、パミス極大粒と焼土粒子を微量含む暗褐色土、第4層は粘性がやや弱く、焼土粒子と炭化粒子を多量に含む灰赤色土、第5層は粘性がやや強く、焼土粒子を多量に含む赤色土、第6層は粘性がやや強く、焼土粒子と炭化粒子を多量に含む暗赤灰色土、第7層は粘性が弱く、ローム粒子を少量、焼土粒子を微量含むにぶい褐色土である。カマドの構築状況は以下のとおりである。袖部は明黄褐色ロームの造り出しで、粘性がやや弱く、パミス小粒とローム粒子・粘土粒子を少量含む灰褐色土（第8層）と粘土、或は粘土とロームの混合土が貼られていたと考えられる。なお、煙道部の天井も、第8層の灰褐色土と粘土によって造られていたと考えられる。煙道部は第8層の灰褐色土が貼られ、燃焼部の奥側は、粘性がやや弱く、ローム粒子を微量含む暗褐色土（第10層）と、粘性がやや弱く、ローム粒子と粘土粒子を少量含む褐灰色土（第9層）、燃焼部の焚口側は、粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む明黄褐色土（第12層）と粘性が弱く、パミス極小粒とローム粒子・粘土粒子を微量含む灰黄褐色土（第11層）が貼られている。

遺物は、土師器の甕・坏・高坏・坏蓋等が出土している。13－1・2・4・11、19－1は土師器の甕である。13－1は小型長胴甕で2は小型球胴甕である。また、19－1は口縁が外反する長

第7表　H5号住居址出土遺物一覧表(3)

挿図番号	器種	石質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	備考
14－1	砥石	流紋岩	〈7.4〉	5.1×4.9		四面砥
14－2	砥石	安山岩	9.8	6.0	2.0	扁平四面砥
14－3	砥石	安山岩	9.3	4.5	3.75	使用面2面
14－4	石錘	石英安山岩	9.3	7.8	3.8	両辺に刻みを入れている
14－5	敲石	安山岩	〈8.1〉	5.2	〈3.1〉	縁を中心に敲打痕
14－6	不明	安山岩	〈6.8〉	7.0	〈2.4〉	

胴甕である。13－3は大型の高坏で坏部内面が黒色である。13－5～9は坏である。全て丸底で、外稜より上が直線的に外傾して開くもの（13－5・7）と、外反して開くもの（13－9）、外反するが直線的に立ち上がるもの（13－6）、稜を持たず全体が内彎するもの（13－8）の4種類である。13－10は形態より坏蓋と考えられる。14－1～3は砥石である。1は流紋岩製の四面砥、2は安山岩製の扁平四面砥、3は使用頻度の低い安山岩製の棒状砥石である。14－4は石英安山岩製の石錘で両辺に刻みが入れられている。14－5は安山岩製の敲石で縁と端部を中心に敲打痕が認められる。15－7は安山岩製の磨石と考えられ、部分的に光沢を持っている。15－8は黒曜石製のスクレパーで刃部が使用時に欠損している。

以上より本住居址は、古墳時代後期の中葉に位置付けられる。

4）H6号住居址

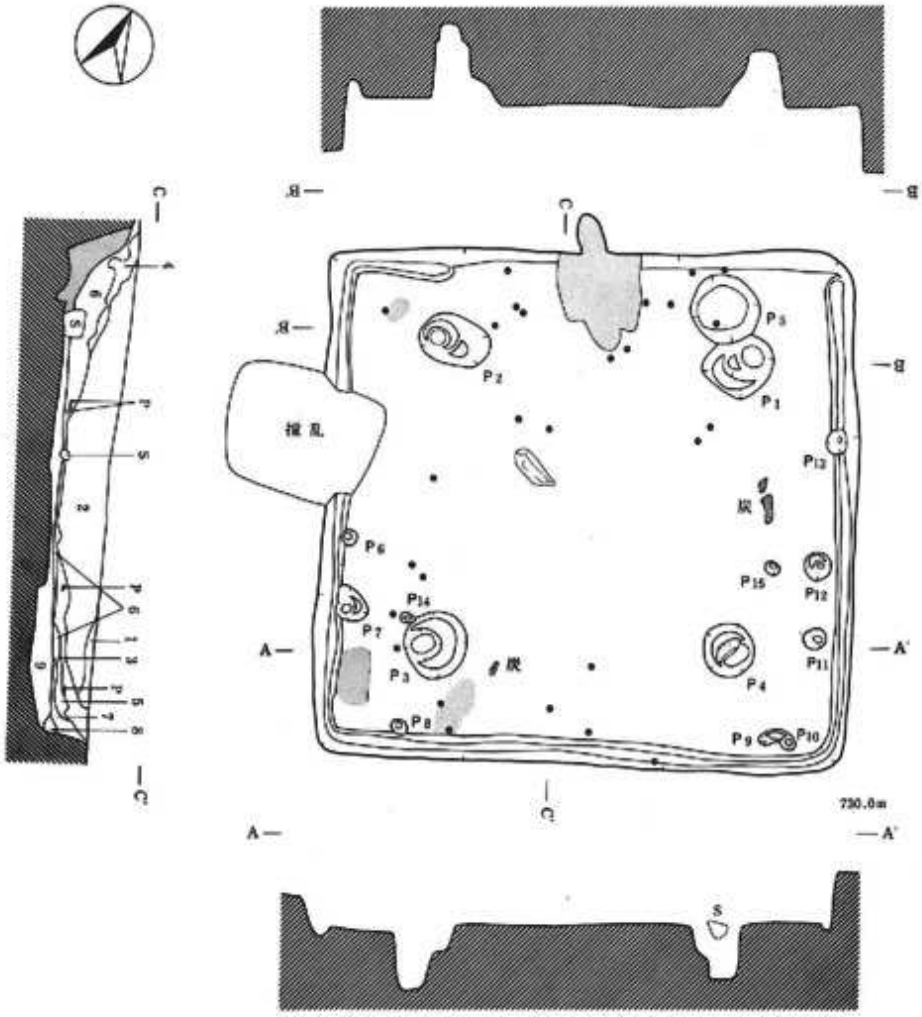
H6号住居址は、調査区第Ⅲ区の南側、ち・つ－6～8グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において単独で検出された。

平面形態は、南北586cm・東西544cmを測り、カマドの煙道部を除くと、ほぼ正方形を呈する。主軸方位はN－33°－Wを指す。

覆土は8層に分割された。第1層は粘性が弱く、ローム粒子を微量、砂粒を多量に含む極暗褐色土、第2層は粘性がやや弱く、パミス極大粒と軽石（径2cm～4cm）を少量含む黒褐色土、第3層は粘性がやや弱く、パミス極大粒を少量、炭化材小片を多量に含む黒褐色土、第4層は粘性がやや弱く、ロームブロック（径2cm以下）を少量含む黒褐色土、第5層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む褐色土、第6層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む橙色土、第7層は粘性がやや弱く、ローム粒子とパミス極大粒を少量含む極暗褐色土、第8層は粘性がやや弱く、軽石（径3cm以下）を少量含む褐色土である。

ピットは主柱穴（P_1～P_4）4個を含む計15個が確認された。P_1は径63cm×67cmで深さ59cm、P_2は径53cm×71cmで深さ84cm、P_3は径64cm×68cmで深さ67.5cm、P_4は径53cm×56cmで深さ59cm、P_5は径74cm×75cmで深さ29cm、P_6は径15cm×18cmで深さ22cm、P_7は径30cm×42cmで深さ28.5cm、P_8は径15cm×19cmで深さ23.5cm、P_9は径14cm×16cmで深さ11.5cm、P_{10}は径16cm×17cmで深さ15.5cm、P_{11}は径22cm×25cmで深さ30cm、P_{12}は径27cm×30cmで深さ27.5cm、P_{13}は径26cm×22cmで深さ14cm、P_{14}は径11cm×15cmで深さ27.5cm、P_{15}は径14cm×17cmで深さ26cmを測る。主たる柱間は、P_1－P_2間が326cm、P_2－P_3間が316cmを測る。

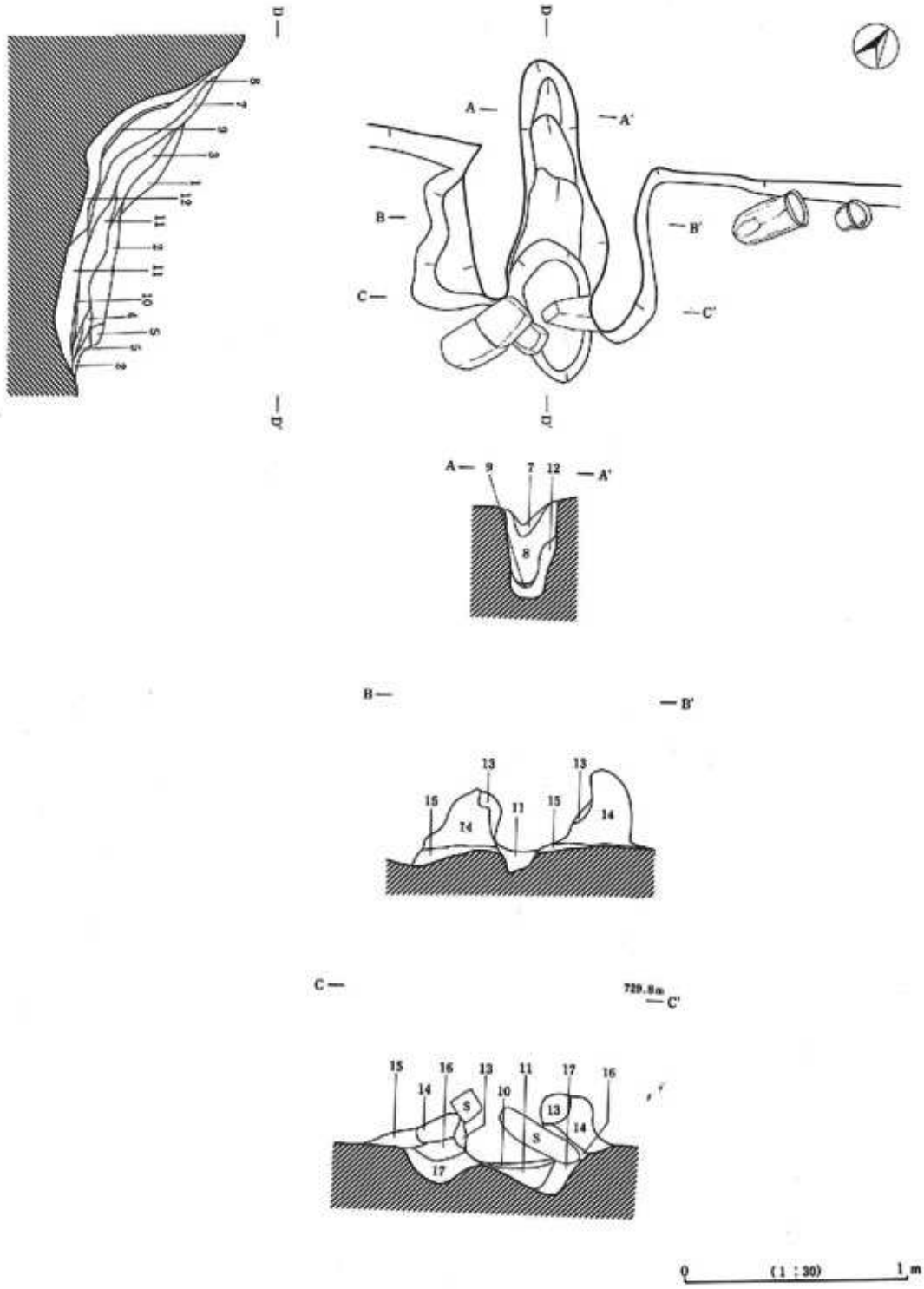
壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの壁残高は24.5cm～78.5cmを測る。壁体は全体層序第Ⅶ層の明黄褐色土を利用し、平滑で堅固である。床面は平坦で、粘性が弱く、ローム粒子を多量に、軽石（径2cm～4cm）を少量含む橙色土が貼られる。また、北壁カマド西側の一部と東側を



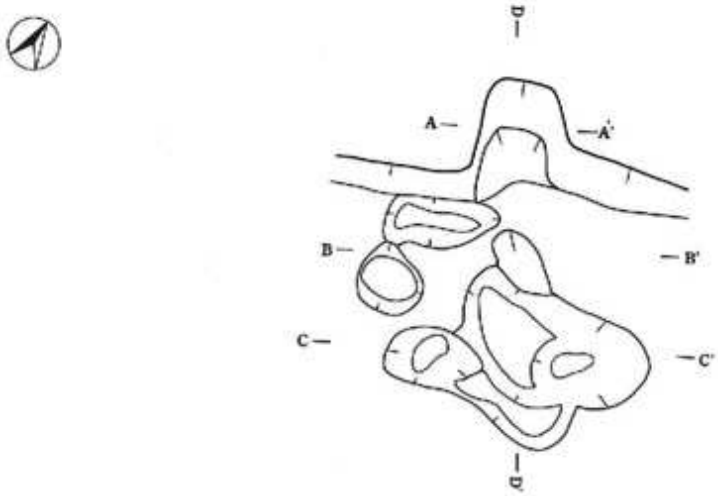
1　極暗褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を微量、砂粒を多量に含む。
2　黒褐色土層　粘性やや弱し。パミス極大粒を少量含む。軽石2cm～4cmφ少量含む。
3　黒褐色土層　粘性やや弱し。パミス極大粒を少量、炭化材小片を多量に含む。
4　黒褐色土層　粘性やや弱し。ロームブロックを少量含む。
5　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量に含む。
6　橙色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量に含む。
7　極暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・パミス極大粒を少量含む。
8　褐色土層　粘性やや弱し。軽石3cmφ少量含む。
9　橙色土層　粘性弱し。軽石2cm～4cmφ少量含む。

0　(1：80)　2m

第16図　H6号住居址実測図



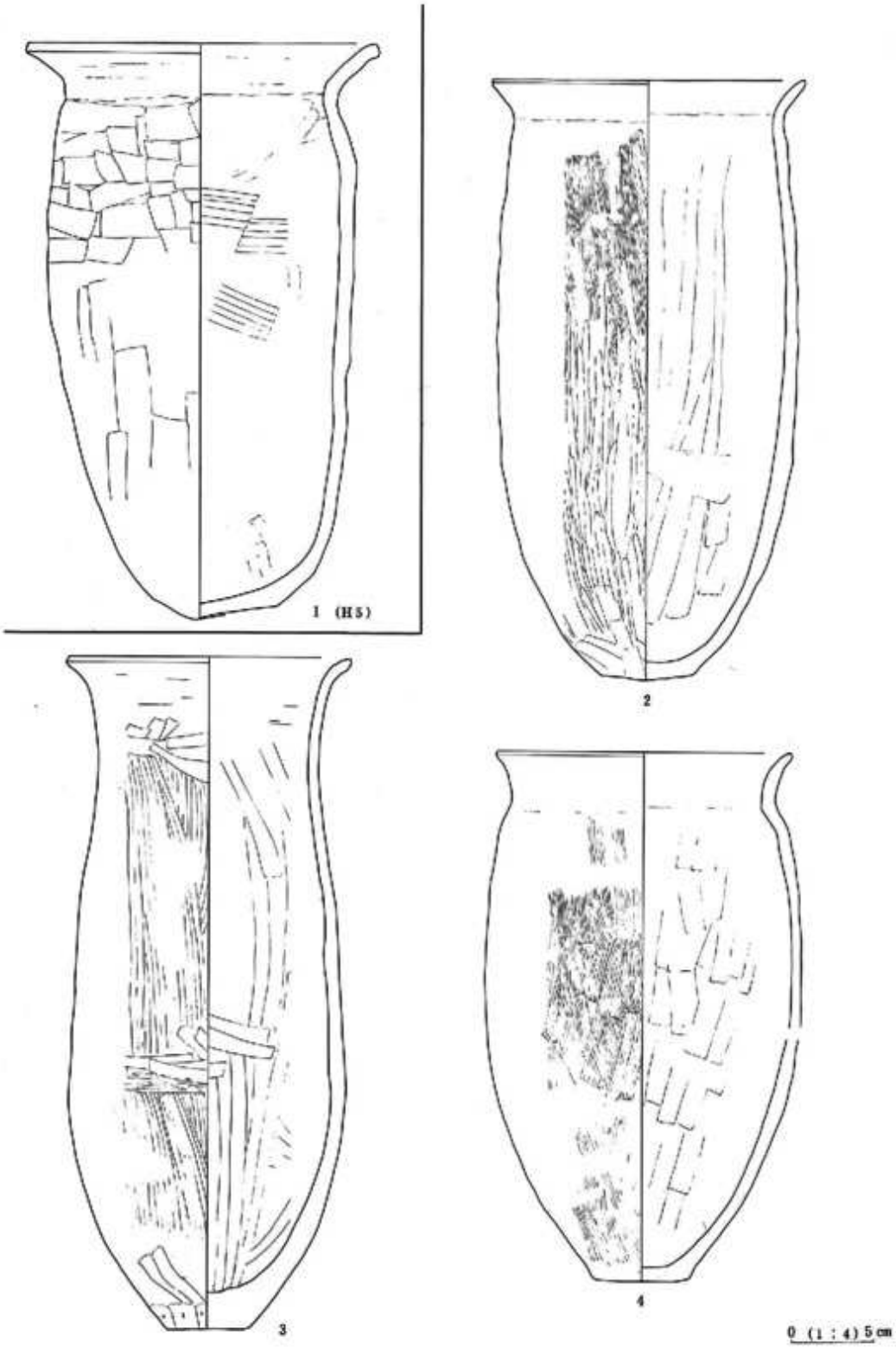
第17図　H 6 号住居址カマド実測図



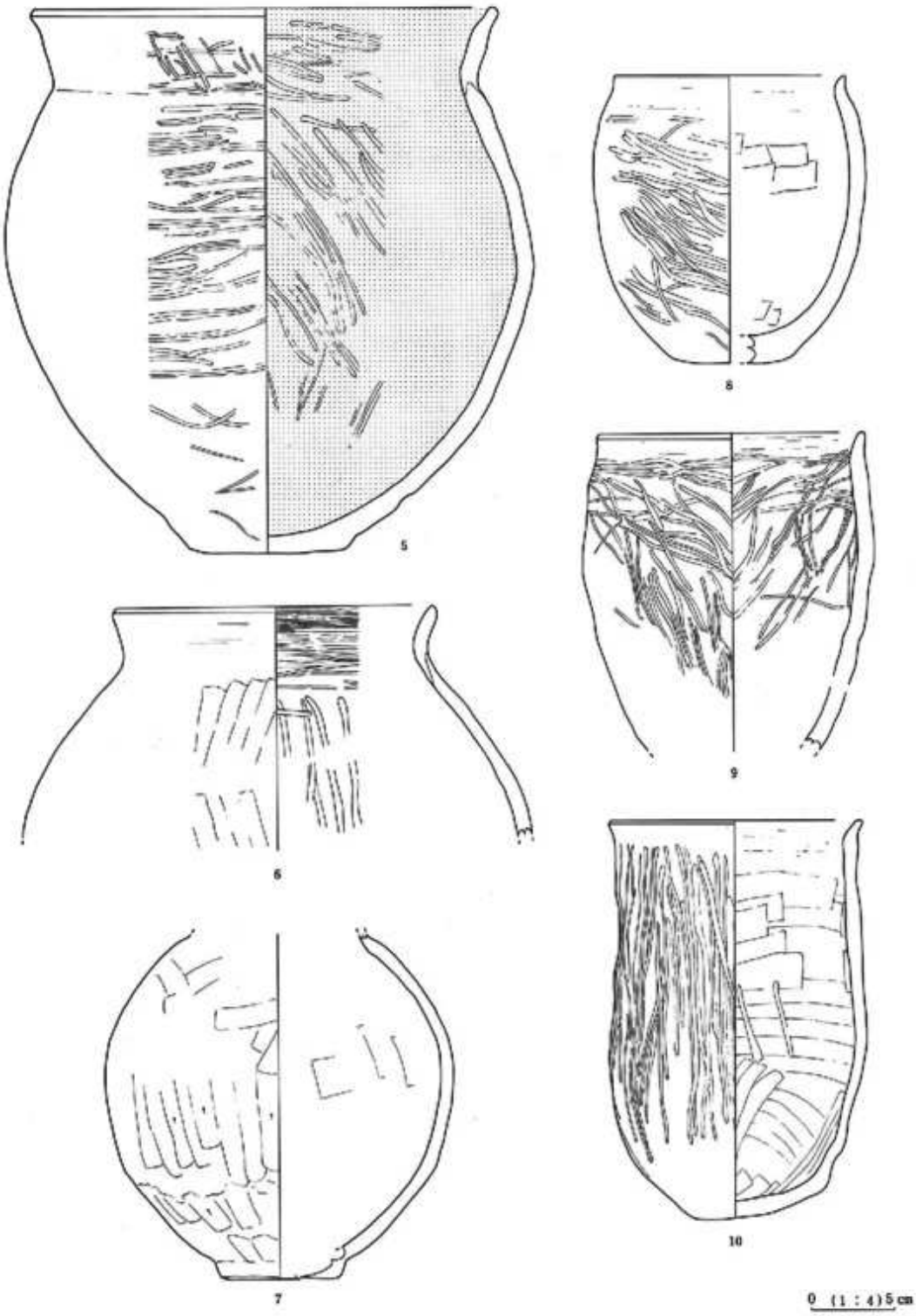
1　橙色土層　粘性やや強し。粘土粒子とローム粒子を多量に含む。
2　褐色土層　粘性やや弱し。粘土粒子・ローム粒子・焼土粒子を少量含む。
3　橙色土層　粘性やや強し。粘土粒子・ローム粒子を少量、焼土粒子を多量に含む。
4　褐色土層　粘性やや弱し。焼土粒子と炭化粒子を少量含む。
5　灰褐色土層　粘性やや強し。炭化粒子を多量に含む。
6　明赤褐色土層　粘性やや弱し。焼土粒子を多量に含む。
7　褐色土層　粘性やや弱し。焼土粒子を少量含む。
8　暗赤褐色土層　粘性やや弱し。焼土粒子・炭化粒子を少量含む。
9　明赤褐色土層　粘性やや弱し。第12層が被熱された層。
10　橙色土層　粘性やや弱し。第11層が被熱された層。
11　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・軽石（径1～3cm）を少量含む。
12　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を多量に含む。
13　赤褐色土層　粘性やや弱し。第14層が被熱された層。
14　黄褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を多量に軽石（径1－5cm）を微量含む。
15　黒褐色土層　粘性やや強し。粘土粒子、焼土粒子を微量含む。
16　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。
17　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子とパミス極大粒を少量含む。

0　(1：30)　1m

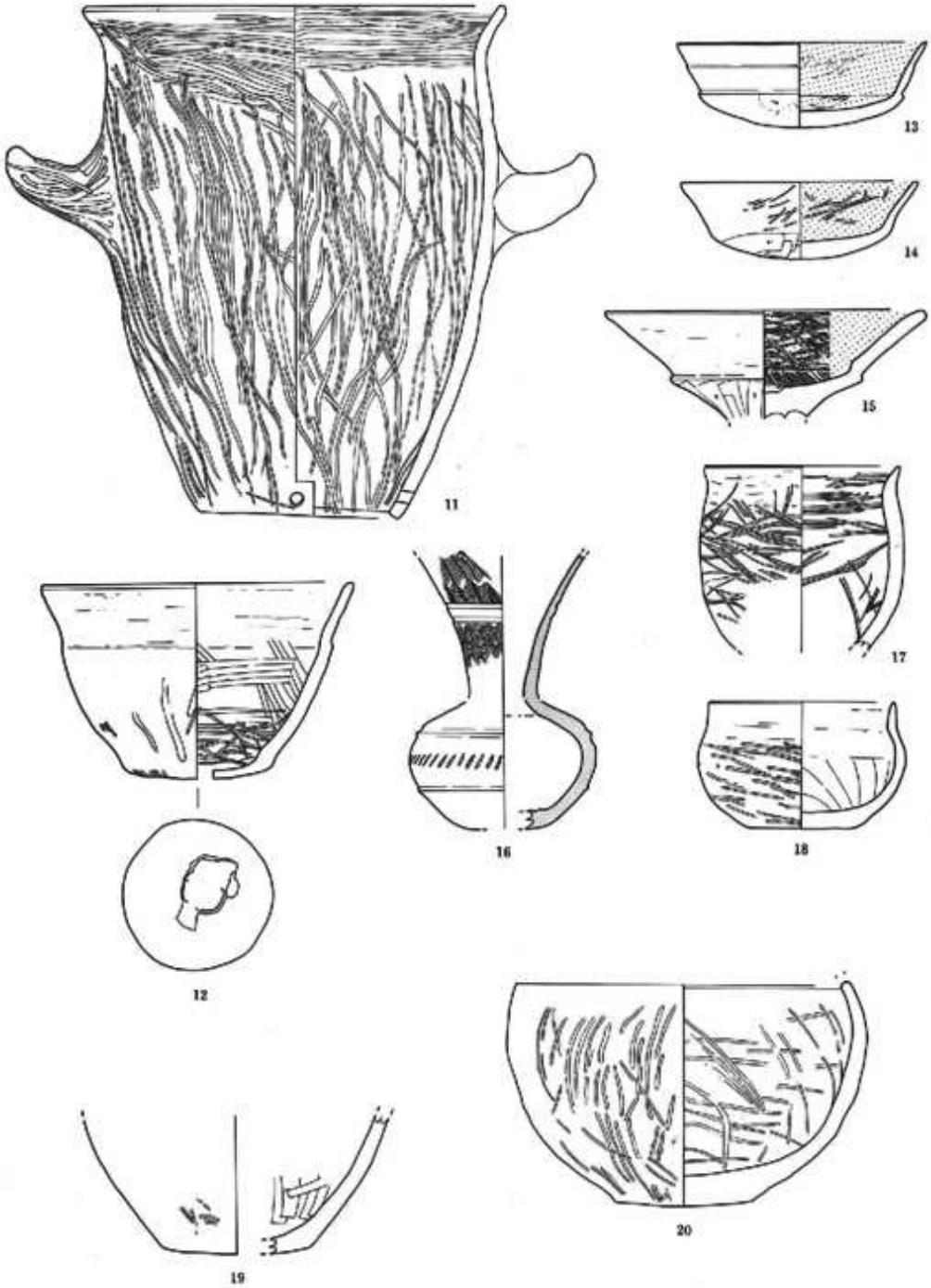
第18図　H6号住居址カマド掘方実測図



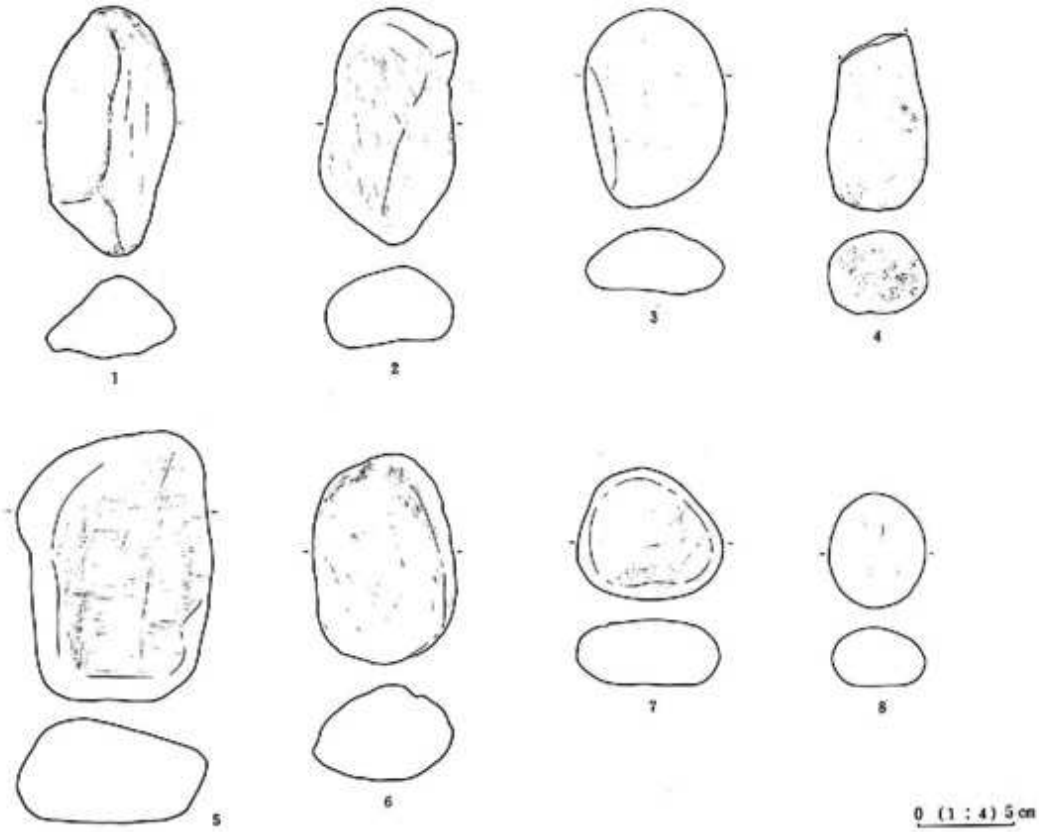
第19図　H５号・H６号住居址出土遺物実測図



第20図　H 6 号住居址出土遺物実測図（2）



第21図　H 6 号住居址出土遺物実測図（3）



第22図　H６号住居址出土遺物実測図（４）

除く全周に１cm～18.5cmの周溝が確認された。なお床面積は26.26㎡を測る。

カマドは北壁中央において検出された。残存状況は比較的良好だが、天井部が崩落していた。また袖石は、東側が西へ倒れ、西側が南へずれていた。天井石は西側へ異動し、西側袖石の上で確認された。現存する規模は、焚口より煙道部まで143.5cm、袖部の巾109cmを測る。現存する東側の袖は、長さ81cm・巾30.5cm・高さ19cm～73cm、西側の袖は、長さ69cm・巾41cm・高さ14cm～68.5cmを測る。また袖石と天井石は軽石製で面取が行れていた。覆土は８層に分割された。第１層は粘性がやや強く、粘土粒子とローム粒子を多量に含む橙色土、第２層は粘性がやや弱く、粘土粒子とローム粒子・焼土粒子を少量含む褐色土、第３層は粘性がやや強く、粘土粒子とローム粒子・焼土粒子を多量に含む橙色土、第４層は粘性がやや弱く、焼土粒子と炭化粒子を少量含む褐色土、第５層は粘性がやや強く、炭化粒子を多量に含む灰褐色土、第６層は粘性がやや弱く、焼土粒子を多量に含む明赤褐色土、第７層は粘性がやや弱く、焼土粒子を少量含む褐色土、第８層は粘性がやや弱く、焼土粒子と炭化粒子を少量含む暗赤褐色土である。カマドの構築状況は以下のとおりである。袖部は、主として第15層の粘性がやや強く、粘土粒子と焼土粒子を微量含む

第8表　H6号住居址出土遺物一覧表(1)

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
19—2	甕	口径 19.6 底径 6.0 器高 35.6	長胴	口縁部内外面ヨコナデ 胴部上半外面ハケメ後ヘラミガキ、下半ケズリ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	外 5YR 5/6 内 5YR 6/6
19—3	甕	口径 (16.6) 底径 4.5 器高 (40.0)	下半に丸味を持つ長胴 底部にヘラ記号	口縁部内外面ヨコナデ 頸部外面ハケメ後ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ後ハケメ 中央部外面ハケメ後ヘラナデ・ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	10YR 3/1·4/2 5/6 5YR 4/6·3/1
19—4	甕	口径 20.8 底径 (5.0) 器高 34.2	長胴（やや丸味を持つ） 口縁は外反 底部にヘラ記号	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ハケメ 胴部内面ヘラナデ	内7.5YR 6/2 外 10YR 5/3
20—5	甕	口径 27.0 最大径 31.1 底径 9.2 器高 32.2	球胴	口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部内外面ハケメ後ヘラミガキ、内面黒色	外7.5YR 5/4
20—6	甕	口径 18.6 器高 (13.7)	球胴 口縁短く外反	口縁部外面ヨコナデ 口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ 胴部外面ヘラナデ 胴上部内面ヘラナデ後ヘラミガキ、胴中央部内面ハケメ後ヘラミガキ	10YR 6/6
20—7	甕	底径 (7.0) 最大径 (20.6)	小型球胴	胴部外面ヘラケズリ 胴部内面ヘラナデ	10YR 6/3 ～6/4
20—8	甕	口径 (13.5) 底径 (6.3) 器高 17.0	口縁短い	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラナデ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ	7.5YR 6/3 ～7/3
20—9	甕	口径 15.6 器高 (18.8)	口縁短い	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ケズリ後ヘラミガキ 胴部内面ヘラナデ後ヘラミガキ	7.5YR 6/3 ～6/4
20—10	甕	口径 14.6 底径 7.2 器高 23.5	口縁短い 底部丸味を持った平底 底部大きく歪む	口縁部内外面ヨコナデ 胴外面ケズリ後ヘラミガキ、一部ナデ後ヘラミガキ 胴内面ヘラナデ	7.5YR 6/6 ～3/2

黒褐色土、第14層の粘性がやや弱く、ローム粒子を多量に、軽石（径１～５㎝）を微量含む黄褐色土の順で構築される。また袖石付近では第14・15層の下に、第16層の粘性がやや弱く、ローム粒子を微量含む黒褐色土と、第17層の粘性がやや弱く、ローム粒子とパミス極大粒を少量含む褐色土が確認された。なお第13層の粘性がやや弱い赤褐色土は、第14層が熱を受けて変色した層と認識した。さらに覆土の状況より、袖は第14層の周囲に粘土が貼られていたと考えられ、天井部も粘土が主体だったと想定される。煙道部は第12層の粘性がやや弱く、ローム粒子を多量に含む

第９表　Ｈ６号住居址遺物一覧表(2)

挿図番号	器種	法量 ㎝	形態の特徴	手法の特徴	備考
21—11	甑	口径 23.0 孔径 11.0 器高 28.2	胴中央２ケ所に把手 （長さ5.5·巾5.1·厚3.3） 開孔部に径6.5㎜の穿孔2個	口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、胴部内面ヘラナデ後ヘラミガキ	内10ＹＲ 6/4 外7.5ＹＲ 5/6
21—12	甑	口径 17.2 底径 8.4 孔径 （2.1） 器高 10.8	底部より直線的に外傾	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラケズリ後ヘラナデ、さらにヘラミガキ 胴部内面ハケメ後ヘラミガキ	10ＹＲ 3/4 ～5/3
21—13	坏	口径 13.8 器高 4.7	体部・口縁直線的に外傾	口縁・体部外面ヨコナデ 底部ヘラケズリ 内面ヘラミガキ・黒色	外10ＹＲ 5/6
21—14	坏	口径 13.0 器高 4.25	体部・口縁外反 口縁端部に沈線	口縁・体部外面ヘラミガキ 底部ヘラケズリ 内面ヘラミガキ・黒色	外 10ＹＲ 5/4 内 10ＹＲ 6/4
21—15	高坏	口径 17.5 現高 6.0	址部外稜を持って直線的に外傾 脚部欠損後、欠損部を削り再利用か	址部上半外面ヨコナデ 址部下半外面ヘラケズリ 址部内面ヘラミガキ・黒色	外 10ＹＲ 6/4
21—16	瓶（須）		頸部・口縁やや外反しながらラッパ状に開く	口縁部外面二条の沈線 その上下に波紋文 胴中央部外面、櫛による刺突文 内面ロクロヨコナデ	7.5Y 5/1
21—17	鉢	口径 (10.7) 器高 〈10.2〉	口縁短い	口縁内外面ナデ後ヘラミガキ 胴外面ヘラケズリ後ヘラミガキ 胴内面ヘラナデ後ヘラミガキ	内10 ＹＲ 5/6 外7.5ＹＲ 3/3 ～3/1
21—18	鉢	口径 (10.1) 器高 7.0	口縁直立	口縁内外面ヨコナデ 胴外面ヘラミガキ 胴内面ヘラナデ	5ＹＲ 5/6 7.5ＹＲ 6/6· 1.7/1
21—19	甕	底径 （8.1）	丸味を持った平底	外面ヘラミガキ 内面ヘラナデ	5ＹＲ 5/6
21—20	甕	口径 18.4 底径 7.6 器高 12.4	小型球胴 胴上半部を欠き、縁をケズって再利用	内外面ヘラナデ後ヘラミガキ	10ＹＲ 6/4 ～4/6

第10表　H６号住居址出土遺物一覧表(3)

挿図番号	器種	石質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	備考
22－1	不明	安山岩	12.8	6.7	4.3	擦石の可能性有す
22－2	不明	安山岩	12.1	7.0	4.3	擦石の可能性有す
22－3	不明	石英安山岩	10.2	7.2	4.5	表面に擦過痕 擦石の可能性有す
22－4	擂石	安山岩	(9.0)	5.2	4.2	端部を擦面として使用
22－8	砥石	安山岩	13.8	9.8	5.4	二面（表裏）を使用面として使用
22－6	擦石	雑粒安山岩	10.8	7.3	5.2	表裏二面を擦面として使用
22－7	擦石	軽石	7.5×6.7		3.4	表面に擦過痕
22－8	擦石	安山岩	5.9	4.9	3.2	表面に擦過痕

第11表　H６号住居址出土一覧表(4)

挿図番号	種類	石質	法量 cm 長さ	巾	厚さ	備考
23－9	搬入小礫	チャート	1.65	1.1	0.55	部分的に光沢有り 磨石とも考えられる

0 (2：3) 2cm

第23図　H６号住居址
出土遺物実測図（５）

褐色土によって構築され、第９層の粘性がやや弱い明赤褐色土は、第12層が熱を受けて変色した層と認識した。燃焼部は主として第11層の粘性がやや弱く、ローム粒子と軽石（径１～３cm）を少量含む褐色土によって構築される。また第10層の粘性がやや弱い橙色土は、第11層が熱を受けて変色した層と認識した。

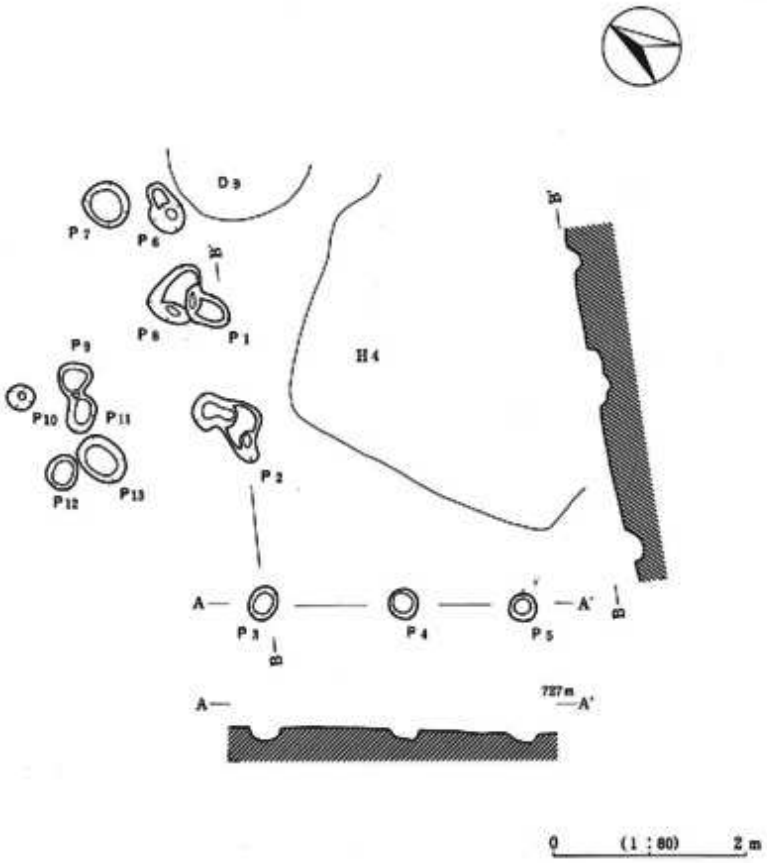
遺物は、土師器の甕・坏・高坏・鉢と須恵器の甑が出土している。また混入遺物として、赤色塗彩のある弥生時代後期の坏か高坏の口縁部片と平安時代の須恵器の坏の口辺部片２点が出土している。19－２～４は土師器の長胴甕である。３と４に古い様相が２に新しい様相が窺れる。また３・４には底部にヘラ記号が認められた。20－５・６は球胴甕である。５は内面に黒色研磨が行れる。20－７、21は小型球胴甕である。20は胴部上半を欠損した後、同じ高さに割ったり削ったりして縁を揃えて鉢として再利用したと考えられる。20－８～10、21－18は小型甕である。何

れも頸部がなく、口縁が短い器形を持つ。21－11・12は甑である。11は大型甑で胴中央部の２ヶ所に把手が付けられ、開口端部の２ヶ所に穿孔が穿たれる。12は小型甑で底部に一ヶ所の穴が開けられる。21－13・14は土師器の坏で外稜を持つが、14の方は外稜が緩かになっている。なお内面は黒色である。21－15は高坏で、坏部の下部に外稜を持つ。脚部は欠損しているが、欠損部を磨いて平らにしている事から、坏としての再利用が考えられる。21－16は須恵器の瓶で、口縁部と底部を欠いている。21－17・18は土師器の鉢である。また石製品は、砥石（22－５）と擂石（22－４）、擦石（22－６～８）等が出土している。５は台石状の砥石で二面を砥面として使用している。４はスリコギ状の棒状擂石で基部を欠損している。

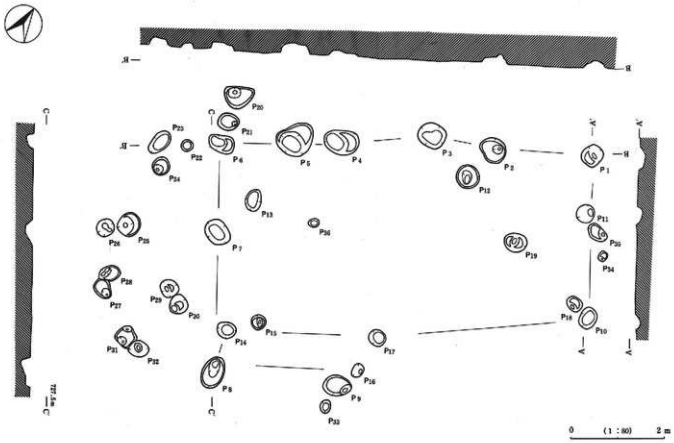
以上より本住居址は、古墳時代後期後葉に位置付けられる。

2　掘立柱建物址

1）Ｆ２号掘立柱建物址



第24図　Ｆ２号掘立柱建物址実測図



第25図　F 3 号掘立柱建物址実測図

F２号掘立柱建物址は、調査区第Ⅱ区の南側、お・か－５・６グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層及び第Ⅷ層上面において検出された。なおＨ４号住居址及びＤ９号土坑と切り合い関係にあると考えられるが、新旧関係については不明である。

本址は、不規則であるが３間×２間の掘立柱建物址と考えられる。主たる柱間はP_2－P_3間で165cm、P_3－P_4間で146cm、P_4－P_5間で126cmを測る。

P_1は径30.5cm×50cmで深さ13.5cm、P_2は径67.5cm×72cmで深さ17cm、P_3は径28cm×35.5cmで深さ15cm、P_4は径30.5cm×31cmで深さ14cm、P_5は径29cm×29.5cmで深さ12.5cm、P_6は径33.5cm×54.5で深さ17cm、P_7は径46.5cm×48.5cmで深さ12cm、P_8は径47.5cm×62.5cmで深さ18cm、P_9は径32.5cm×35cmで深さ14cm、P_{10}は径26cm×29cmで深さ16cm、P_{11}は径29.5cm×40.5cmで深さ12.5cm、P_{12}は径31.5cm×36.5cmで深さ15cm、P_{13}は径40.5cm×54cmで深さ23cm、

各ピットの掘り方は、円形ないしは楕円形・不整形を呈する。

なお、北を主とした主軸方位は、N－51°－Eを指す。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

２）Ｆ３号掘立柱建物址

Ｆ３号掘立柱建物址は、調査区第Ⅱ区の中央、き～け－７～９グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。

本址は、短軸が２間で長軸が不規則な柱間の掘立柱建物址である。主たる柱間はP_1－P_2間で255cm、P_1－P_3間で426cm、P_3－P_4間で275cm、P_4－P_6間で310cm、P_6－P_7間で235cm、P_7－P_{14}間で262cm、P_{14}－P_{17}間で408cm、P_1－P_{11}間で150cm、P_{11}－P_{10}間で276cm、P_{17}－P_{18}間で564cmを測る。

P_1は径42cm×45cmで深さ14cm、P_2は径54cm×59cmで深さ20.5cm、P_3は径53cm×57cmで深さ24cm、P_4は径51cm×75cmで深さ18cm、P_5は径71cm×79cmで深さ22.5cm、P_6は径40cm×58.5cmで深さ19cm、P_7は径46.5cm×60cmで深さ20cm、P_8は径48.5cm×70.5cmで深さ22.5cm、P_9は径45.5cm×61cmで深さ20cm、P_{10}は35.5cm×46cmで深さ11.5cm、P_{11}は径37.5cm×39cmで深さ9.5cm、P_{12}は径49.5cm×49cmで深さ23.5cm、P_{13}は径33.5cm×47.5cmで深さ23.5cm、P_{14}は径35cm×41cmで深さ21cm、P_{15}は32cm×32cmで深さ17.5cm、P_{16}は径23cm×32.5cmで深さ17cm、P_{17}は径34.5cm×38cmで深さ18.5cm、P_{18}は径29cm×35.5cmで深さ16cm、P_{19}は径40.5cm×49cmで深さ18.5cm、P_{20}は径48.5cm×63cmで深さ23cm、P_{21}は径37cm×46cmで深さ15cm、P_{22}は径24cm×26cmで深さ10cm、P_{23}は径37.5cm×58cmで深さ14.5cm、P_{24}は径37cm×38cmで深さ17.5cm、P_{25}は径46cm×51cmで深さ21cm、P_{26}は径36.5cm×39cmで深さ17cm、P_{27}は径33.5cm×45cmで深さ24cm、P_{28}は径32.5cm×46cmで深さ22cm、P_{29}は径38cm×39cm

で深さ24cm、P_{30}は径40.5cm×42cmで深さ24cm、P_{31}は径47cm×50.5cmで深さ24.5cm、P_{32}は径36.5cm×45cmで深さ20cm、P_{33}径22.5cm×33cmで深さ11cm、P_{34}は径19cm×21cmで深さ13.5cm、P_{35}は径31cm×46.5cmで深さ17cm、P_{36}は径18cm×23.5cmで深さ12cmを測る。

各ピットの掘り方は、ほとんどが円形・楕円形を呈するが、P_{31}のみ隅丸方形である。

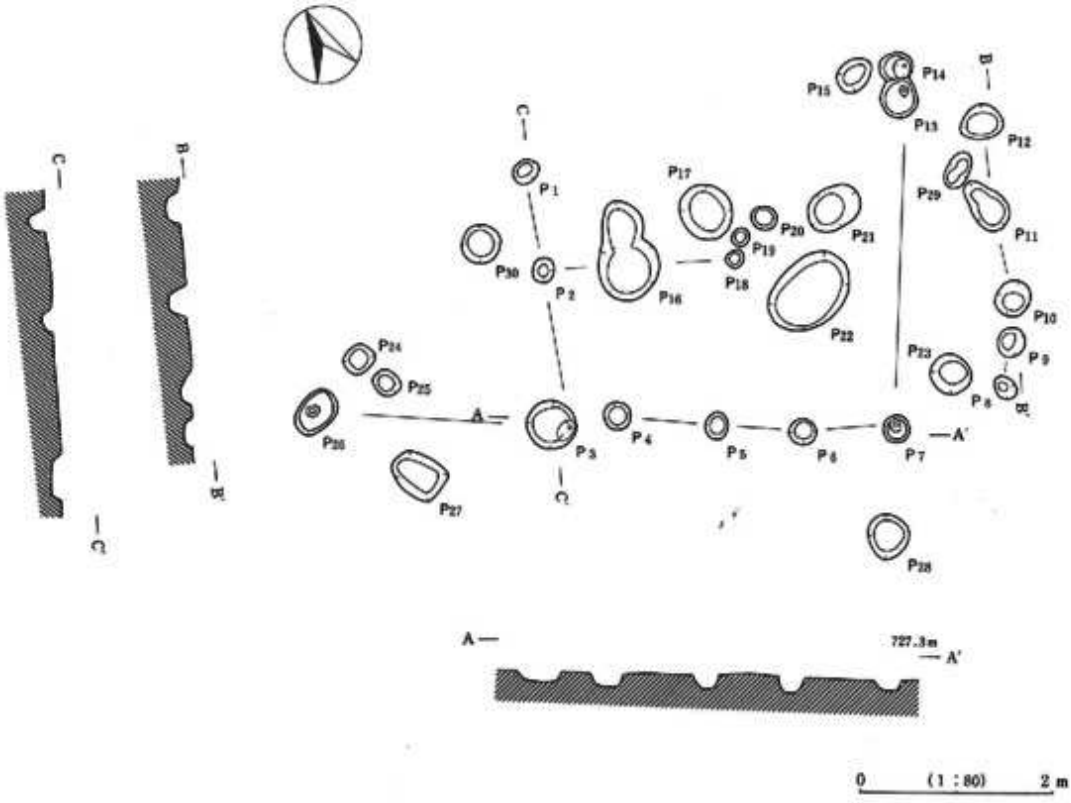
なお、北を主とした主軸方位は、N－30°－Wを指す。

遺物は出土せず、所産期も不明である。

3）F４号掘立柱建物址

F４号掘立柱建物址は、調査区第Ⅱ区の南側、か・き－６・７グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層及び第Ⅷ層上面において検出された。

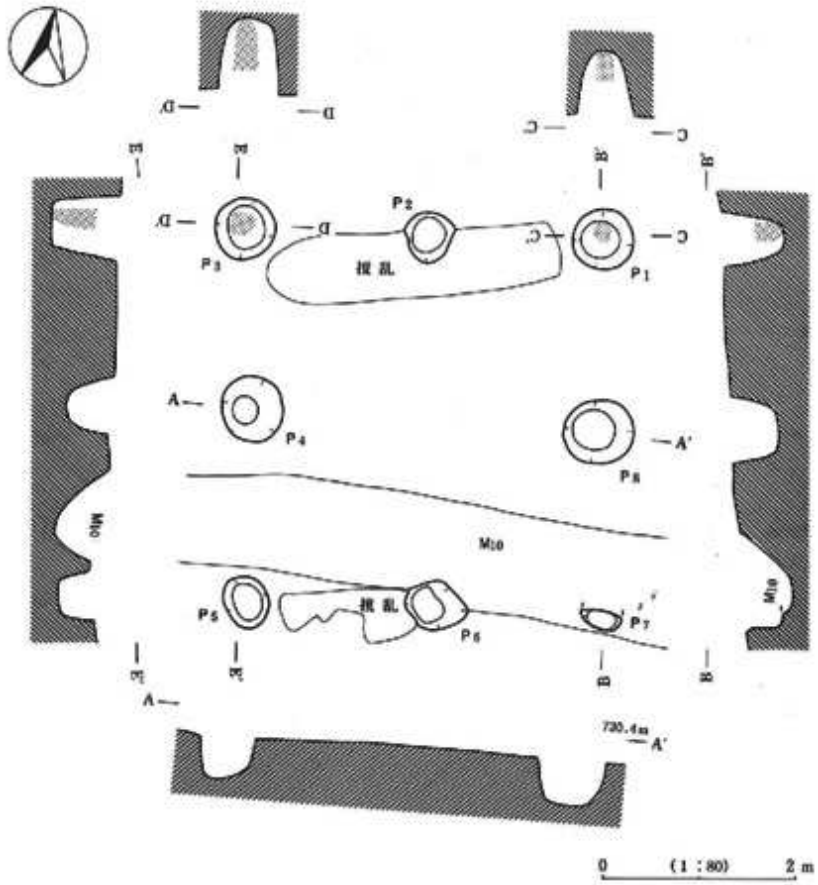
本址は、不規則な柱間を持つ掘立柱建物址である。主たる柱間は、P_1－P_2間で106cm、P_2－P_3間で165cm、P_4－P_5間で103cm、P_5－P_6間で90cm、P_6－P_7間で94cm、P_7－P_{13}間で343cmを測る。P_4－P_7間は比較的安定した柱間だが、他は不規則である。



第26図　F４号掘立柱建物址実測図

P_1は径24cm×29cmで深さ15.5cm、P_2は径22.5cm×25.5cmで深さ10cm、P_3は径49cm×52.5cmで深さ23cm、P_4は径29cm×29cmで深さ15cm、P_5は径23cm×28.5cmで深さ16cm、P_6は径26cm×27.5cmで深さ18.5cm、P_7は径28cm×28.5cmで深さ20cm、P_8は径21.5cm×26.5cmで深さ9.5cm、P_9は径29cm×31.5cmで深さ16cm、P_{10}は径34.5cm×48cmで深さ16.5cm、P_{11}は径36.5cm×59cmで深さ18cm、P_{12}は径37.5cm×45cmで深さ14.5cm、P_{13}は径39cm×41.5cmで深さ13cm、P_{14}は径28cm×36.5cmで深さ15cm、P_{15}は径30.5cm×41.5cmで深さ13cm、P_{16}は径63.5cm×104cmで深さ17.5cm、P_{17}は径52.5cm×56.5cmで深さ12.5cm、P_{18}は径18.5cm×20.5cmで深さ13cm、P_{19}は径18cm×20.5cmで深さ12.5cm、P_{20}は径25cm×27.5cmで深さ15cm、P_{21}は径43.5cm×58.5cmで深さ20cm、P_{22}は径65.5cm×92.5cmで深さ17.5cm、P_{23}は径40cm×42.5cmで深さ10cm、P_{24}は径28cm×32.5cmで深さ14.5cm、P_{25}は径25cm×28.5cmで深さ10.5cm、P_{26}は径35.5cm×51cmで深さ24.5cm、P_{27}は径43cm×57cm深さ16.5cm、P_{28}は径43cm×46.5cmで深さ17.5cm、P_{29}は径25.5cm×40.5cmで深さ18cm、P_{30}は径39.5cm×41cmで深さ11.5cmを測る。

各ピットの掘方は、主として円形ないしは楕円形を呈する。



第27図　F5号掘立柱建物址実測図

なお、北を主とした主軸方位は、N－33.5°－Eを指す。

遺物は出土せず、所産期は不明である。

4）F５号掘立柱建物址

F５号掘立柱建物址は、調査区第Ⅲ区の中央、ち・つ－10·11グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出され、M10号溝状遺構に破壊される。

本址は、２間×２間の掘立柱建物址である。主たる柱間は、P_1－P_2間が178cm、P_2－P_3間が192cm、P_3－P_4が192cm、P_4－P_5間が197cm、P_1－P_3間が370cm、P_3－P_5間が389cmを測る。

P_1は径61cm×63cmで深さ64.5cm、P_2は径52.5cm×54cmで深さ38cm、P_3は径62.5cm×58cmで深さ74.5cm、P_4は径64cm×68.5cmで深さ51.5cm、P_5は径44.5cm×55.5cmで深さ40.5cm、P_6は現存で径52.5cm×65cm・深さ43.5cm、P_7は現存で径19cm×43.5cm・深さ35.5cm、P_8は径65.5cm×73.5cmで深さ50.5cmを測る。またP_1・P_3で柱痕が確認された。P_1は径24cm×27cm、P_3は径19cm×22.5cmを測る。

各ピットの掘方は、円形ないしは楕円形を呈する。

なお、北を主とした主軸方位は、N－20°－Wを指す。

遺物はP_5とP_6より土師器の甕の胴部片が出土している。

所産期は、遺物より古墳時代の後期と推定される。

5）F６号掘立柱建物址

F６号掘立柱建物址は、調査区第Ⅲ区の南側、た・ち－９・10グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において単独で検出された。

本址は、１間×２間の掘立柱建物址である。主たる柱間は、P_1－P_2間が144cm、P_2－P_3間が148cm、P_3－P_4間が233cm、P_6－P_1間が234cmを測る。

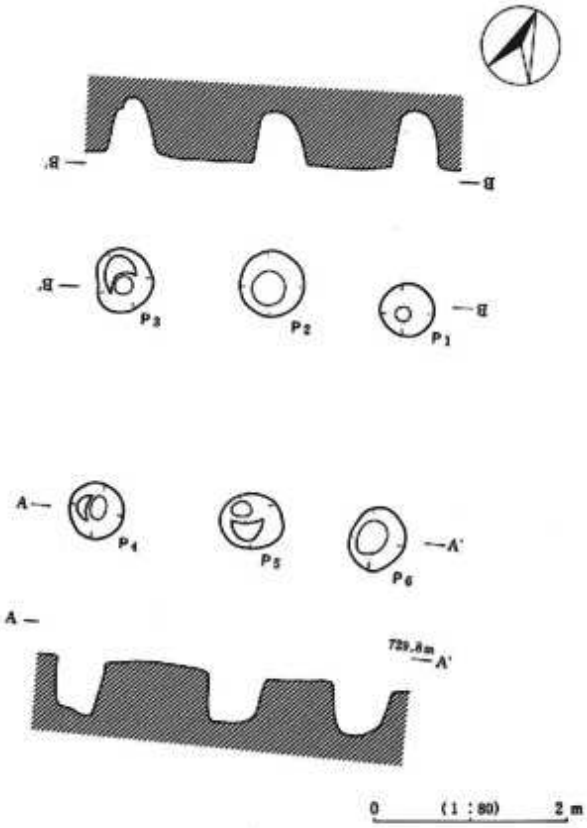
P_1は径55cm×56.5cmで深さ61cm、P_2は径61.5cm×69cmで深さ54.5cm、P_3は径60.5cm×74.5cmで深さ54.5cm、P_4は径55cm×58cmで深さ58cm、P_5は径57cm×64.5cmで深さ51cm、P_6は径56cm×66.5cmで深さ53cmを測る。

各ピットの掘方は、円形ないしは楕円形を呈する。

なお、北を主とした主軸方位は、N－25°－Wを指す。

遺物は、P_1より須恵器甕の頸部片、P_2より土師器坏の底部片、P_3より土師器甕の胴部片等が出土している。

以上より本遺構の所産期は、古墳時代の後期と推定される。



第28図　F6号掘立柱建物址実測図

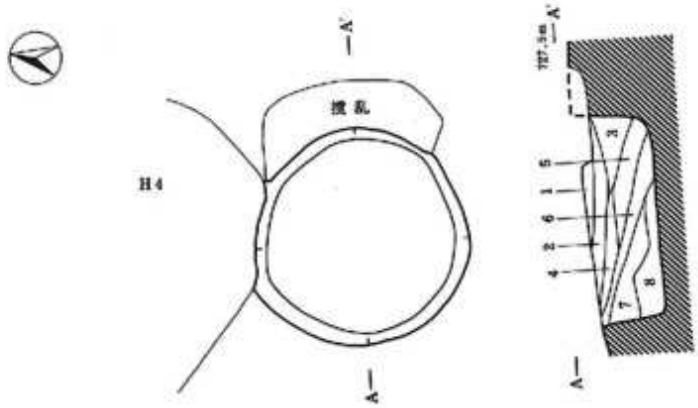
3　土坑

1）D8号土坑

D8号土坑は、調査区第Ⅱ区の南側、お－5グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において単独で検出され、北側をH4号住居址に、東側を攪乱によって破壊される。

平面形態は、166cm×173cmの円形を呈している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は平滑で堅固である。床は緻密で固くしまっており平坦である。なお確認面からの壁高は44cm～53cmを測り、床面積は1.71㎡を測る。

覆土は8層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミスを少量・ローム粒子を多量に含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、パミス小粒とローム粒子を多量に含む暗褐色土、第3層は粘性がやや弱く、ローム粒子を微量含む黒褐色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む褐色土第5層は粘性が弱く、ローム粒子をやや多量に含む暗褐色土、第6層は粘性がやや強く、ローム



1　黒褐色土層　粘性弱し。パミスを少量、ローム粒子を多量に含む。
2　暗褐色土層　粘性弱し。パミス小粒とローム粒子を多量に含む。
3　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子を微量含む。
4　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量に含む。
5　暗褐色土層　粘性弱し。ローム粒子をやや多量含む。
6　黒色土層　粘性やや強し。ローム粒子を微量含む。
7　褐色土層　粘性弱し。パミス極小粒・ローム粒子を少量含む。
8　黒褐色土層　粘性やや弱し。パミス小粒・ローム粒子を微量含む。

0　(1：60)　1m

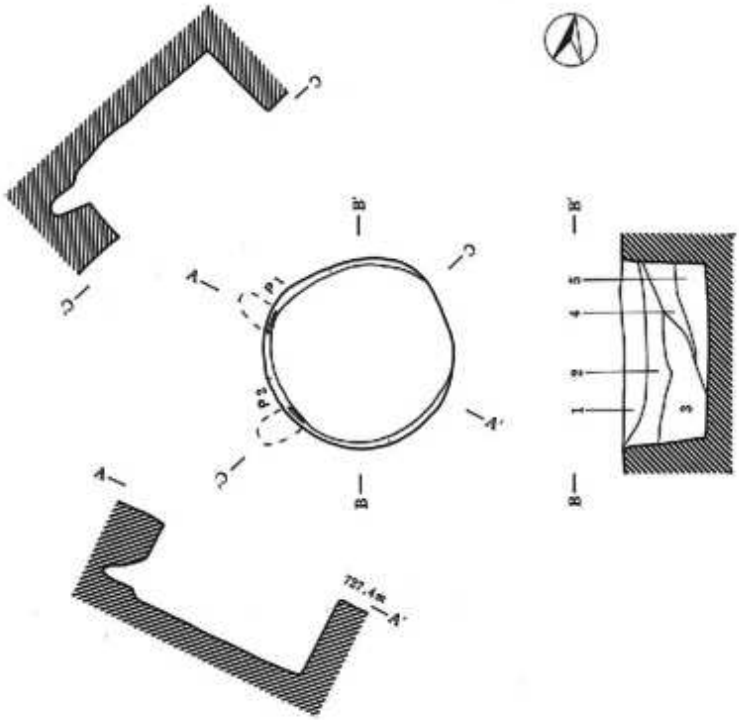
第29図　Ｄ８号土坑実測図

粒子を微量含む黒色土、第７層は粘性が弱く、パミス極小粒とローム粒子を少量含む褐色土、第８層は粘性がや弱く、パミス小粒とローム粒子を微量含む黒褐色土である。

遺物は出土しなかったが、重複関係にあるＨ４号住居址より古い所産期を与えることができよう。

２）Ｄ９号土坑

Ｄ９号土坑は、調査区第Ⅱ区の南側、か－５グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面におい



1　褐色土層　粘性弱し。パミス（極小～中粒）を微量、ローム粒子を多量に含む。
2　黒褐色土層　粘性弱し。パミスを微量、ローム粒子を多量に含む。
3　黒色土層　粘性やや強し。パミス・ローム粒子を微量に含む。
4　黒褐色土層　粘性やや強し。パミスを少量、ローム粒子を微量含む。
5　黒色土層　粘性やや強し。パミスを微量含む。

0　(1：60)　1m

第30図　D９号土坑実測図

て検出された。なおＦ２号掘立柱建物址と切り合い関係にあるが、新旧関係は不明である。

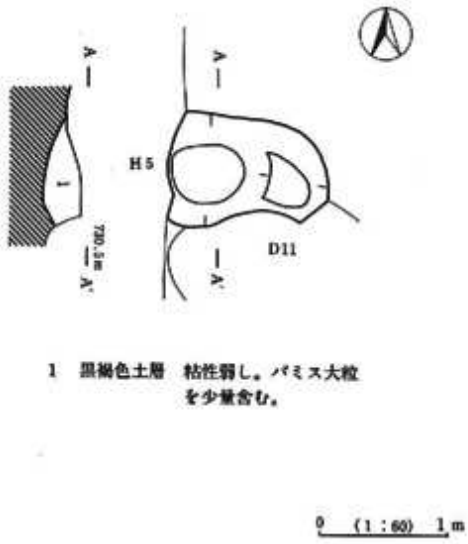
平面形態は、151㎝×145㎝の円形を量する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は平滑で堅固である。床は固くしまっており平坦である。また壁中に２個のピットが確認された。P_1は径18.5㎝×26㎝で奥行27㎝、P_2は径17.5㎝×18.5㎝で奥行27.5㎝を測る。ピットは落し穴の杭跡とも考えられるが、断定は避けたい。なお確認面からの壁高は58.5㎝～68㎝を測り、床面積は1.5㎡を

測る。

覆土は５層に分割された。第１層は粘性が弱く、パミス（極小～中粒）を微量、ローム粒子を多量に含む褐色土、第２層は粘性が弱く、パミスを微量、ローム粒子を多量に含む黒褐色土、第３層は粘性がやや強く、パミスとローム粒子を微量に含む黒色土、第４層は粘性がやや強く、パミスを少量、ローム粒子を微量含む黒褐色土、第５層は粘性がやや強く、パミスを微量含む黒色土である。

遺物は、古墳時代後期の甕片３点と甑の開孔部片が出土している。

3）D10号土坑



第31図　D10号土坑実測図

D10号土坑は、調査区第Ⅲ区の北側、と－９グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出され、Ｈ５号住居址に西側を、D11号土坑に南側を破壊される。

平面形態は楕円形を呈すると考えられる。規模は現存で89.5cm×125cmを測る。また確認面より最深部までの深さは20cm～35.5cmを測る。

覆土は、粘性が弱く、パミス極大粒を少量含む黒褐色土の１層のみが確認された。

遺物は出土しなかった。また、所産期は不明だが、重複関係よりD11号土坑・Ｈ５号住居址よりは古い位置付けができる。

4）D11号土坑

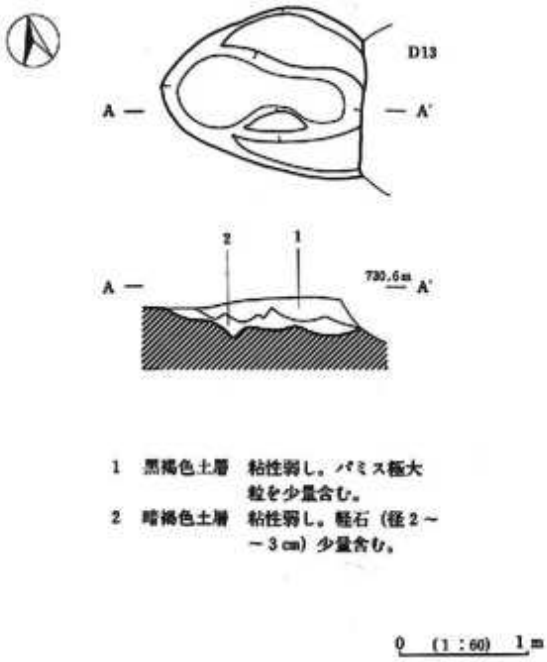
D11号土坑は、調査区第Ⅲ区の北側、と－９グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出され、D12号土坑に南側を破壊される。

平面形態は楕円形を呈すると考えられる。規模は現存で155cm（長軸）×127cm（短軸）を測

る。また確認面より最深部までの深さは30cm～33.5cmを測る。

覆土は2層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミス極大粒を少量含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、軽石（径2cm～3cm）を少量含む暗褐色である。

遺物は出土しなかった。また、所産期は不明だが、重複関係よりD12号土坑よりは古い位置付けができる。



第32図　D11号土坑実測図

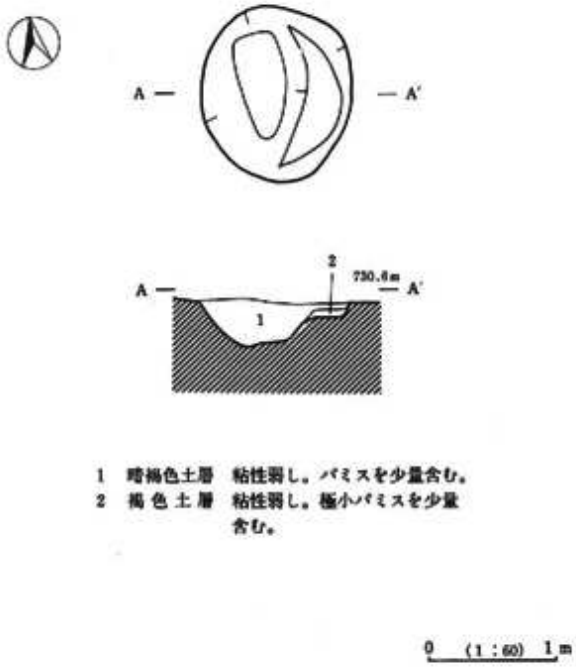
5）D12号土坑

D12号土坑は、調査区第Ⅲ区の北側、と－8・9グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。

平面形態は楕円形を呈し、規模は137cm（長軸）×117cm（短軸）を測る。また確認面より最深部までの深さは23.5cm～32cmを測る。なお長軸方位はN－5.5°－Wを指す。

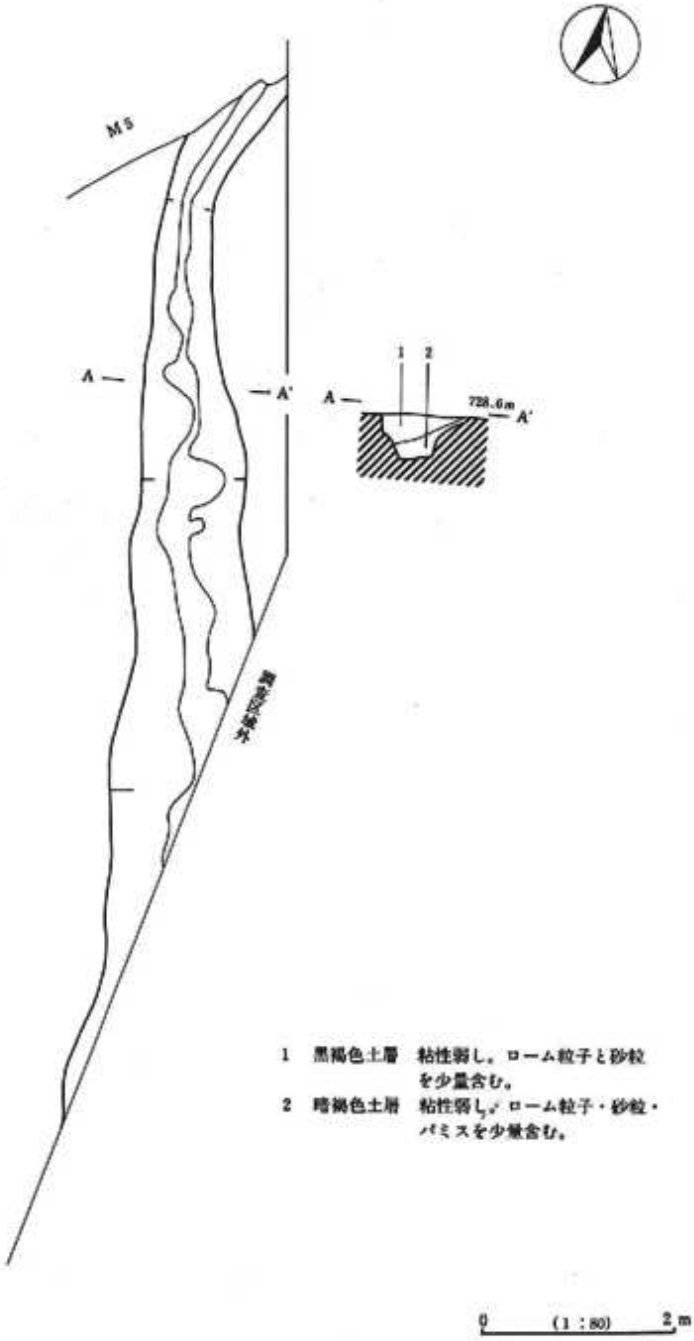
覆土は2層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミスを少量含む暗褐色土、第2層は粘性が弱く、極小パミスを少量含む褐色土である。

遺物は出土しなかった。また、所産期は不明だが、重複関係よりD11号土坑よりは新しい位置付けができる。

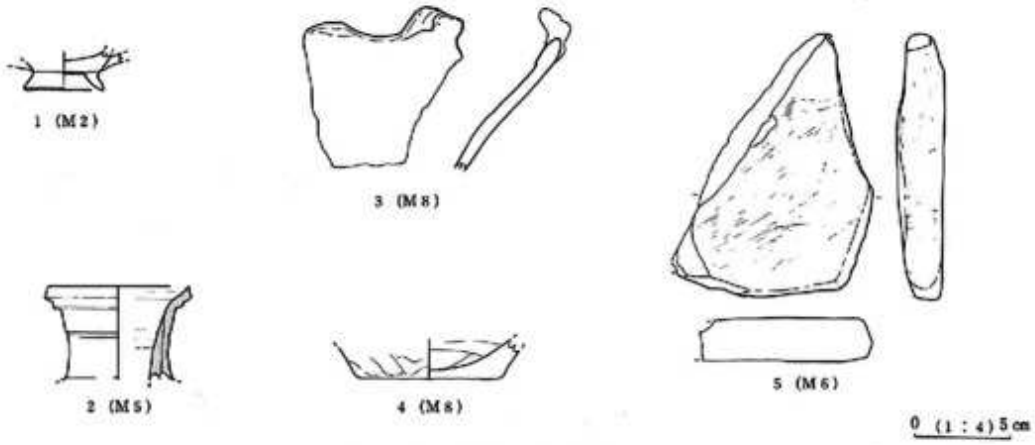


第33図　D12号土坑実測図

4　溝状遺構



第34図　M２号溝状遺構実測図



第35図　溝状遺構出土遺物実測図

第12表　溝状遺出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
35－1	耳皿	底径4.0		全体に黒色	10Y4/1 ～3/1
35－2	壺（須）	口径（7.2）	頸部中央に沈線	鉄釉？ 内外面ヨコナデ	
35－3	深鉢	―――		無文	縄文後期
35－4	甕	底径（7.2）		内外面ナデ	2.5YR4/4
35－5	敲台	長さ〈13.7〉・巾〈8.8〉・厚さ2.5		安山岩（台石） 表面に擦過痕	

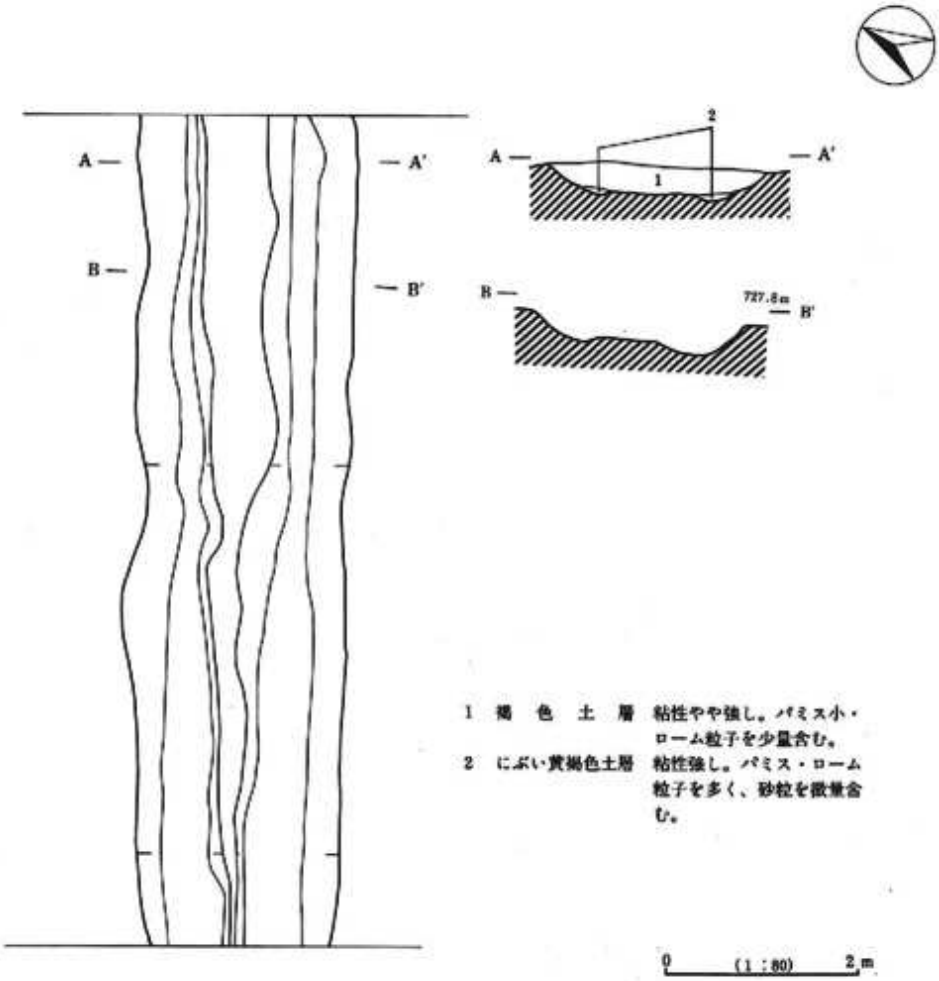
1）M2号溝状遺構

M2号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の北東側、し～せ－5・6グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層中において検出された。

規模は、全長18.2cm（調査区内検出値）・最大巾1.2mを測り、北より南に向かってレベルを低下させている。なお勾配率は2.6%である。また、壁面と床面は凹凸が激しく、水の流れた痕跡が認められる。

覆土は2層に分割された。第1層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を少量含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、ローム粒子・砂粒・パミスを少量含む暗褐色土である。

遺物は、土師器の甕・坏と須恵器の甕、灰釉陶器の坏、耳皿、土師質土器等が出土しているが、何れも破片である。35－1は耳皿で黒色土器と考えられる。なお、所産期は不明である。



第36図 M5号溝状遺構実測図

2）M5号溝状遺構

M5号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の北側、さ－10·11、し－10·11、せ－5～7、す－7グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層上面において検出された。

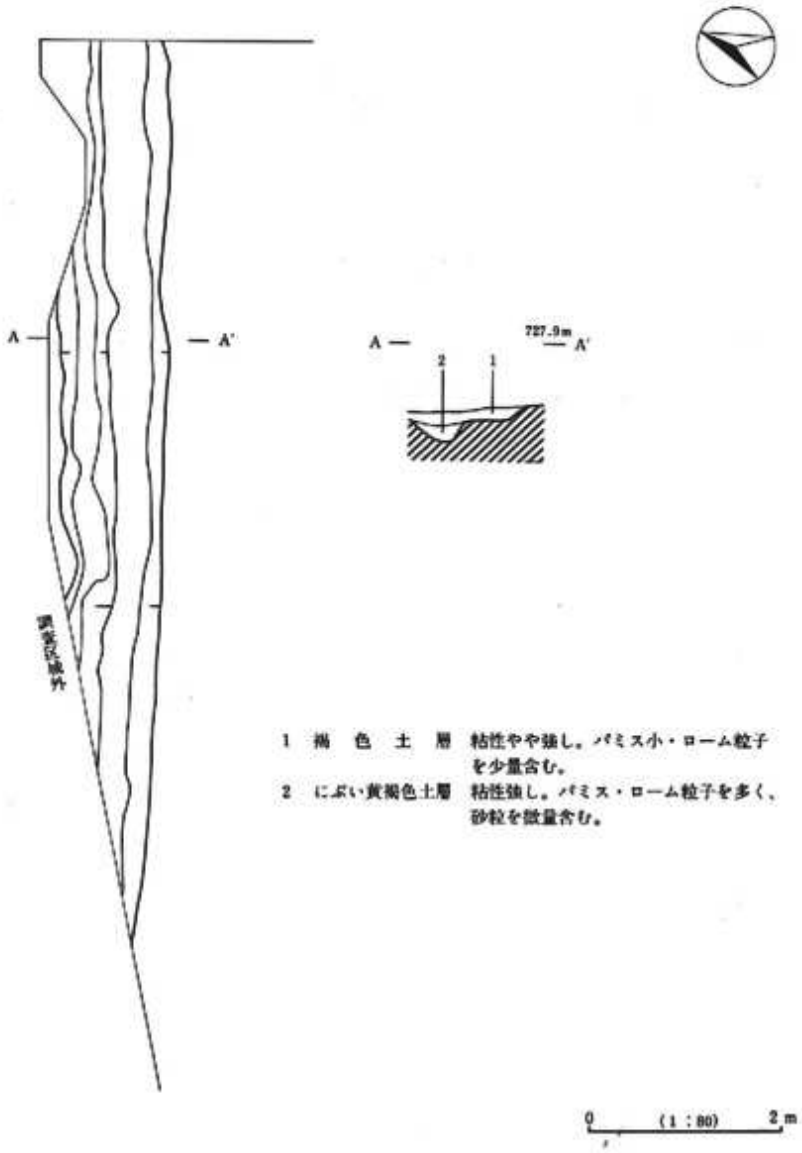
規模は、全長31.2m（検出値）・最大巾2.29mを測る。

覆土は2層に分割された。第1層は粘性がやや強く、パミス小粒とローム粒子を少量含む褐色土、第2層は粘性が強く、パミスとローム粒子を多量に、砂粒を微量含むにぶい黄褐色土である。なお覆土の状態より、第2層上面が使用面、下面は轍の跡と考えられる。

以上より本遺構は道の跡と考えられる。

遺物は、土師器の甕・坏と須恵器の壺・甕、青磁の香炉の脚、不明中近世陶器が出土している

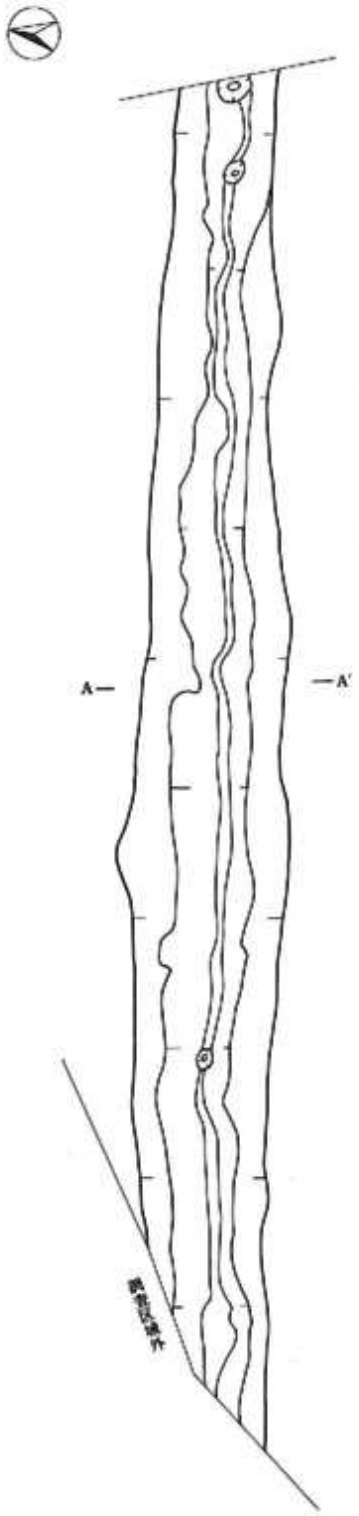
が、何れも破片である。35－２は須恵器の壺で、外面に鉄釉状の釉が施される。

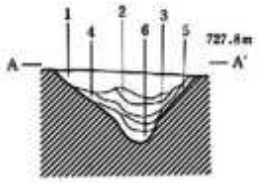


第37図 Ｍ５号溝状遺構実測図

3）Ｍ６号溝状遺構

Ｍ６号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の北側、こ－10～13、さ６～11、し－６・７、す・せ－６グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層中において検出され、Ｍ２号・Ｍ５号溝状遺構に北東部を破壊される。

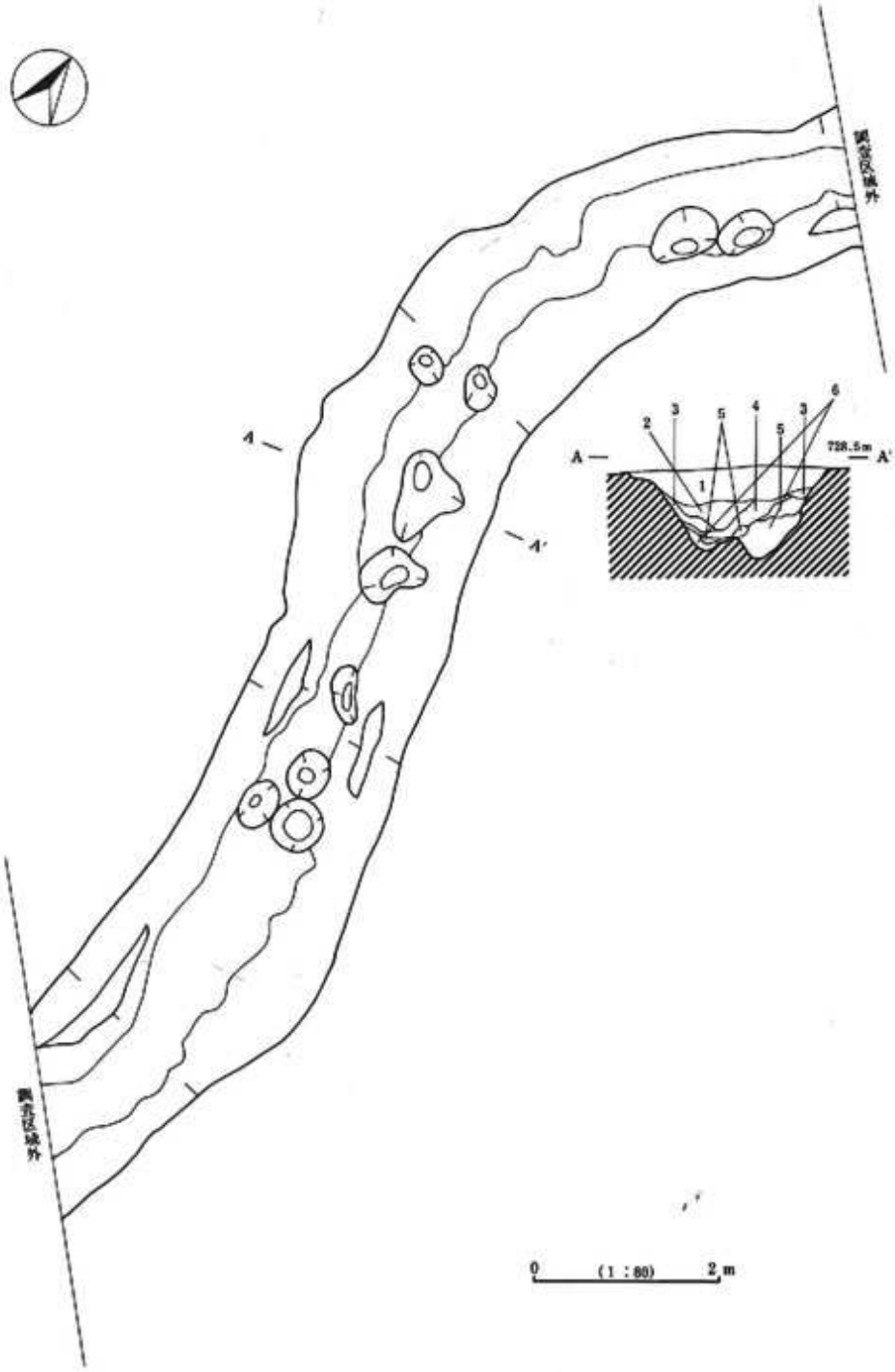




1	黒色土層	粘性やや弱し。パミス・砂粒を少量・粗砂をやや多量に含む。
2	黒褐色土層	粘性弱し。パミス・ローム粒子・粗砂を少量含む。
3	黒褐色土層	粘性弱し。パミス・砂粒・粗砂を少量含む。
4	にぶい黄褐色土層	粘性弱し。ローム粒子・砂粒を多量に含む。
5	灰黄褐色土層	粘性弱し。ローム粒子・砂粒を多量に含む。
6	にぶい黄褐色土層	粘性弱し。パミスを微量、ローム粒子・砂粒を多量に含む。

0 (1 : 120) 2 m

第38図　M 6 号溝状遺構実測図



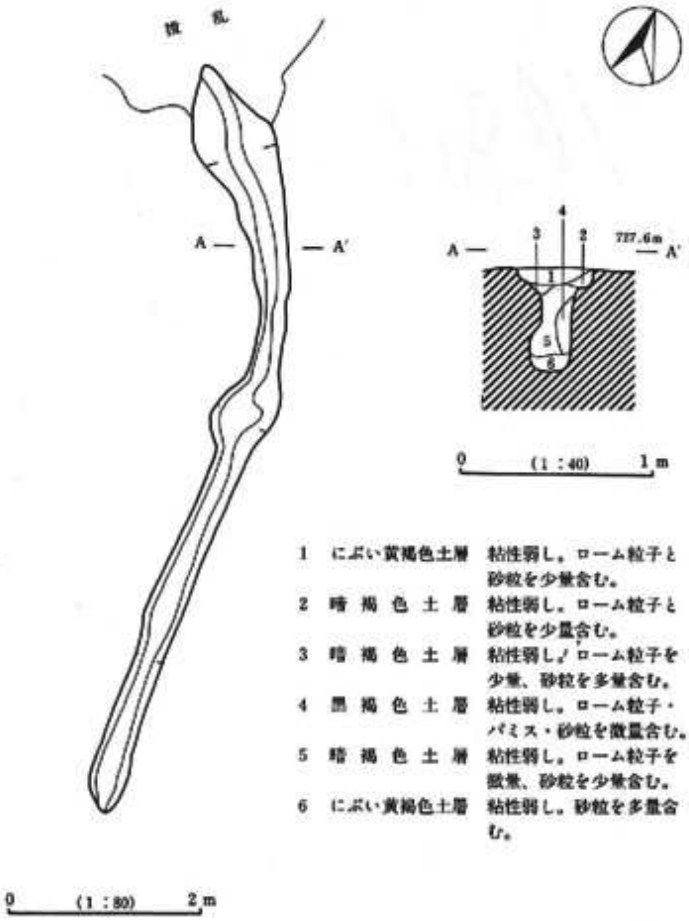
第39図　M 6 号溝状遺構実測図

規模は、全長48.2m（検出値）・最大巾2.3mを測り、一部南下するが、東より西に向かってレベルを低下させている。なお勾配率は3％である。また、壁全体及び床面は凹凸が激しく、水の流れた痕跡が認められる。

覆土は6層に分割された。第1層は粘性が弱く、パミスと砂粒を少量、粗砂を多量に含む黒色土、第2層は粘性が弱く、パミスとローム粒子、粗砂を少量含む黒褐色土、第3層は粘性が弱く、パミスと砂粒、粗砂を少量含む黒褐色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を多量に含むにぶい黄褐色土、第5層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を多量に含む灰黄褐色土、第6層は粘性が弱く、パミスを微量、ローム粒子と砂粒を多量に含むにぶい黄褐色土である。

遺物は、土師器の甕（古墳時代～平安時代）・坏・甑と須恵器の坏・甕、台石等が出土している。35－5は安山岩製で敲台と考えられる。

所産期は不明である。



第40図　M7号溝状遺構実測図

4）M７号溝状遺構

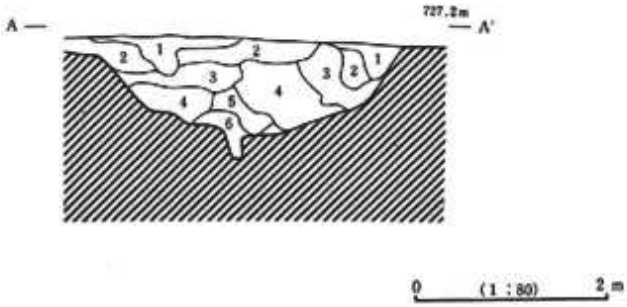
M７号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の中央北側、く～こ－８グリッド内に位置し、全体層序第Ⅲ層中、及びM８号・M９号溝状遺構覆土上面において検出され、北側を攪乱により破壊される。

規模は、全長813cm（現存値）・最大巾82cmを測り、南より北に向かってレベルを低下させている。なお勾配率は４％である。また、壁面及び床面は比較的平滑である。

覆土は６層に分割された。第１層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を少量含むにぶい黄褐色土、第２層は粘性が弱く、ローム粒子と砂粒を少量含む暗褐色土、第３層は粘性が弱く、ローム粒子を少量・砂粒を多量に含む暗褐色土、第４層は粘性が弱く、ローム粒子とパミス・砂粒を微量含む黒褐色土、第５層は粘性が弱く、ローム粒子を微量、砂粒を少量含む暗褐色土、第６層は粘性が弱く、砂粒を多量に含むにぶい黄褐色土である。

所産期は不明である。

5）M８号溝状遺構



1　黒　色　土　層　粘性やや弱し。パミス（中～極大粒）と砂粒を微量含む。
2　黒 褐 色 土 層　粘性弱し。パミスを微量、砂粒を少量含む。
3　暗 褐 色 土 層　粘性弱し。パミスを微量、砂粒を多量含む。
4　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。砂粒を多量含む。
5　黒 褐 色 土 層　粘性弱し。パミス、砂粒を少量含む。
6　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。ローム粗粒子・砂粒を多量含む。

第41図　M８号溝状遺構土層断面図

M８号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の中央北側、く－８～10、け－６～10、こ－５～８、さ－５・６グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において確認され、M７号・M２号溝状遺構に破壊される。

規模は、全長26.1m（確認値）・最大巾3.7mを測り、東より西に向かってレベルを低下させている。また、床面及び壁面は凹凸が激しく、水の流れた痕跡を認めた。

覆土は６層に分割された。第１層は粘性がやや弱く、パミス（中～極大粒）と砂粒を微量含む黒色土、第２層は粘性が弱く、パミスを微量、砂粒を少量含む黒褐色土、第３層は粘性が弱く、パミスを微量、砂粒を多量に含む暗褐色土、第４層は粘性が弱く、砂粒を多量に含むにぶい黄褐色土、第５層は粘性が弱く、パミスと砂粒を少量含む黒褐色土、第６層は粘性が弱く、ローム粗粒子と砂粒を多量に含むにぶい黄褐色土である。

遺物は、土師器と須恵器の甕・縄文土器等が出土している。35－３は縄文時代後期の深鉢の破片である。35－４は土師器の甕の底部である。

所産期は不明である。

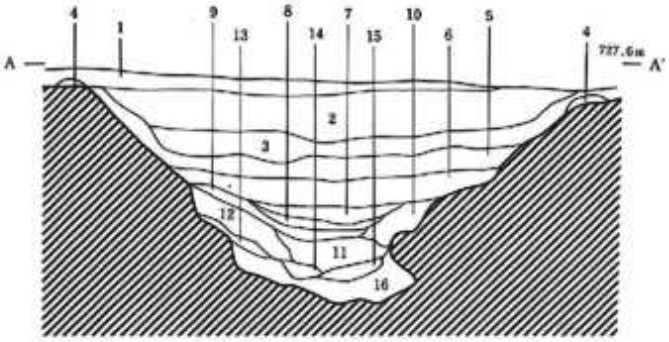
６）M９号溝状遺構

M９号溝状遺構は、調査区第Ⅱ区の北側、け－10～13、こ－６～13、さ－５～10、し－５・６グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において確認され、M６号・M２号溝状遺構に破壊される。なおM８号溝状遺構との重複関係は、遺構の立ち上がりが同一線となり不明である。

規模は、全長36.8m（確認値）・最大巾5.3mを測り、東より西に向かってレベルを低下させている。また、床面及び壁面は凹凸が激しく、水の流れた痕跡が認められた。

覆土は16層に分割された。第１層はローム粒子とパミス・砂粒を少量含む暗褐色土、第２層は砂粒と粗砂・パミスを多量に含む褐色土、第３層はローム粒子と砂粒・パミスを少量含む褐色土第４層はローム粒子を多量に含む褐色土、第５層はパミスと砂粒を微量含む黒褐色土、第６層はパミスを微量含む黒色土、第７層はパミスと砂粒を微量含む黒色土、第８層はパミスと砂粒を少量含む黒褐色土、第９層はパミスを微量、砂粒を少量含む黒褐色土、第10層はパミスを微量含む黒色土、第11層はパミスを少量、砂粒と粗砂を多量に含む褐色土、第12層はパミスとローム粒子を微量含む黒褐色土、第13層はパミスを少量、ローム粒子を多量に含むにぶい黄褐色土、第14層はパミスとローム粒子を微量、砂粒を少量含む暗褐色土、第15層はパミスとローム粒子・砂粒を少量含む褐色土、第16層はローム粒子と砂粒をやや多量に含む褐色土である。

なお、所産期は不明である。



1 暗 褐 色 土 層 ローム粒子・パミス・砂粒を少量含む。
2 褐 色 土 層 砂粒・粗粒・パミスを多量に含む。
3 褐 色 土 層 ローム粒子・砂粒・パミスを少量含む。
4 褐 色 土 層 ローム粒子を多量に含む。
5 黒 褐 色 土 層 パミス・砂粒を微量含む。
6 黒 色 土 層 パミスを微量含む。
7 黒 色 土 層 パミス・砂粒を微量含む。
8 黒 褐 色 土 層 パミス・砂粒を少量含む。
9 黒 褐 色 土 層 パミスを微量、砂粒を多量含む。
10 黒 色 土 層 パミスを微量含む。
11 褐 色 土 層 パミスを少量、砂粒を多量含む。
12 黒 褐 色 土 層 パミス・ローム粒子を微量含む。
13 にぶい黄褐色土層 パミスを少量、ローム粒子を多量含む。
14 暗 褐 色 土 層 パミス・ローム粒子を微量、砂粒・粗粒を少量含む。
15 褐 色 土 層 パミス・ローム粒子・砂粒を少量含む。
16 褐 色 土 層 ローム粒子・砂粒をやや多量含む。

0 (1:80) 2m

第42図 M9号溝状遺構土層断面図

7）M10号溝状遺構

M10号溝状遺構は、調査区第Ⅲ区の中央、ち－10・11、つ－7～11グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。

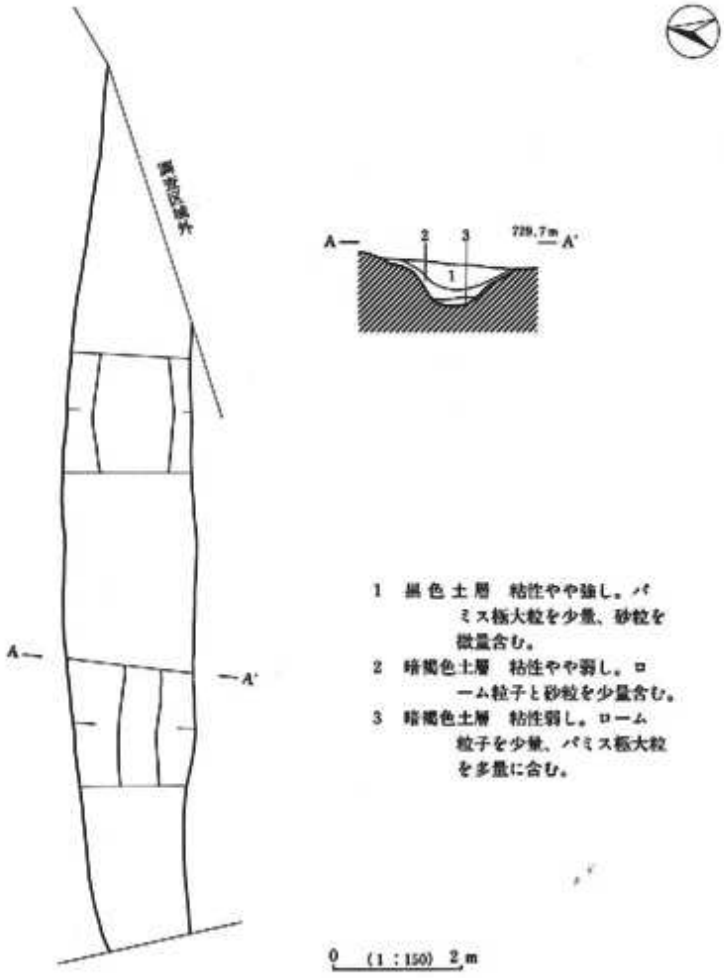
規模は、全長19.32m(検出値)・最大巾1.2mを測る。比高差はほとんどないが、西より東に向かってレベルを低下させている。なお勾配率は0.4%を測る。

覆土は6層に分割された。第1層は粘性が弱く、砂粒と粗砂を少量含む黒褐色土、第2層は粘性が弱く、パミス極大粒を少量含む暗褐色土、第3層は粘性が弱く、砂粒と粗砂を多量に含む褐色土、第4層は粘性が弱く、パミスと砂粒を少量含む褐色土、第5層は粘性が弱く、砂粒と粗砂

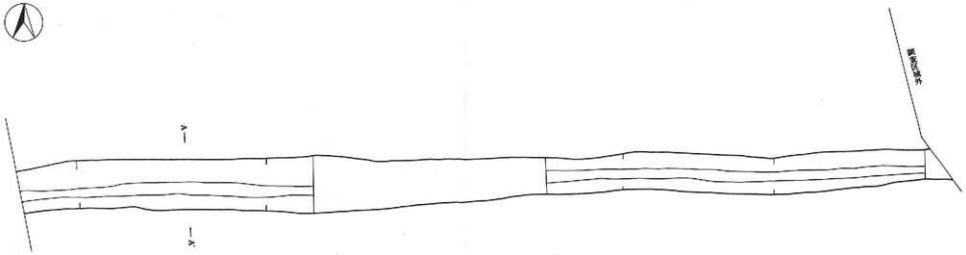
を多量に含むにぶい黄褐色土、第６層は粘性が弱く、砂粒を微量、ローム粒子を多量に含む黄褐色土である。

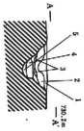
遺物は、土師器の甕の胴部小片１点のみが出土している。

所産期は不明であるが、Ｆ５号掘立柱建物址と重複関係にあり、Ｆ５よりは新しい位置付けができる。



第43図　M11号溝状遺構実測図





1　黒　褐　色　土　層　粘性弱し。砂粒・粗砂を少量含む。
2　暗　褐　色　土　層　粘性弱し。パミス粒大粒を少量含む。
3　褐　色　土　層　粘性弱し。砂粒・粗砂を多量に含む。
4　茶　色　土　層　粘性弱し。パミス・砂粒を多量含む。
5　にぶい黄褐色土層　粘性弱し。砂粒・粗砂を多量に含む。
6　黄　褐　色　土　層　粘性弱し。砂粒を微量、ローム粒子を多量含む。

0　(1:80)　2m

第44図　M10号溝状遺構実測図

8）M11号溝状遺構

M11号溝状遺構は、調査区第Ⅲ区の南側、た－7～10、ち－6・7グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層上面において検出された。

規模は、全長14.94m（検出値）・最大巾2.55mを測り、東より西に向かってレベルを低下させている。なお勾配率は1.4%である。

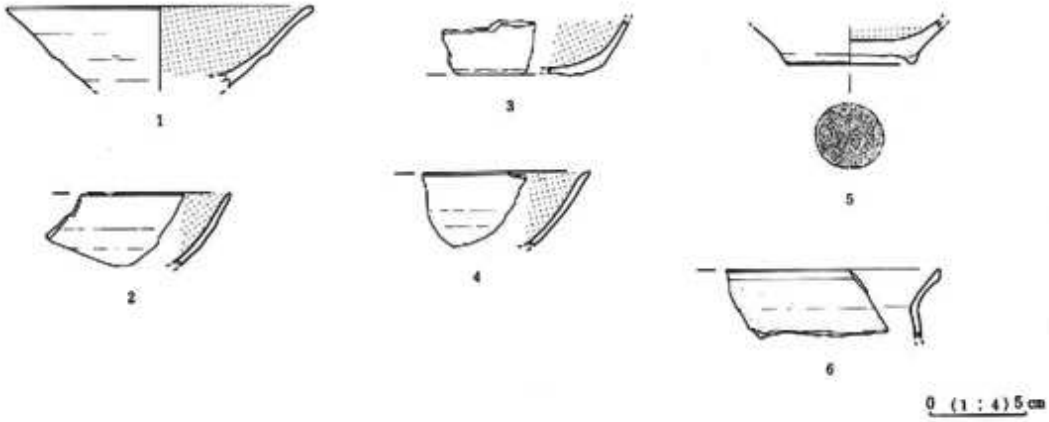
覆土は3層に分割された。第1層は粘性が強く、パミス極大粒を少量、砂粒を微量含む黒色土、第2層は粘性がやや弱く、ローム粒子と砂粒を少量含む暗褐色土、第3層は粘性が弱く、ローム粒子を少量、パミス極大粒を多量に含む暗褐色土である。

遺物は、土師器の甕の底部片、口縁部片、胴部片と坏の口辺部片が出土している。

なお、所産期は不明である。

5　特殊遺構

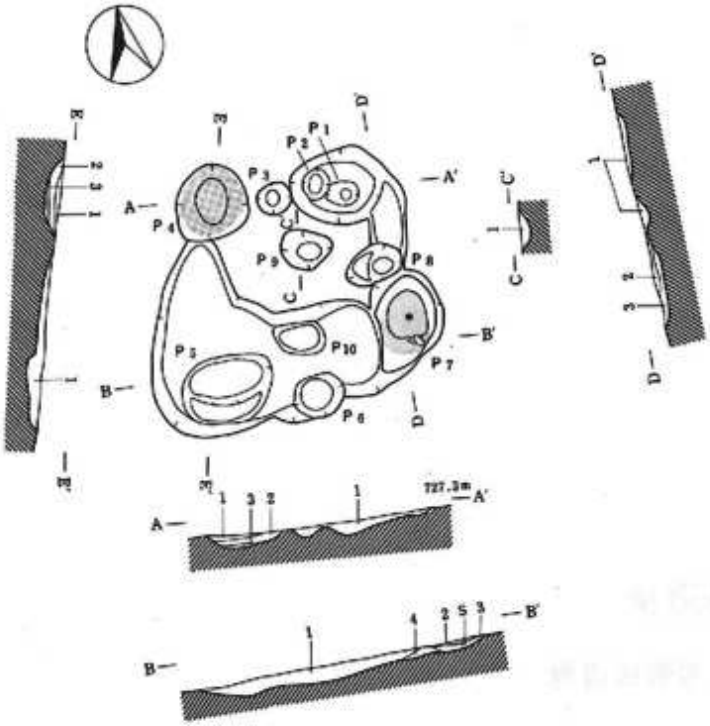
1）T1号特殊遺構



第45図　T1号特殊遺構出土遺物実測図

T1号特殊遺構は、調査区第Ⅱ区の南側、か－6・7グリッド内に位置し、全体層序第Ⅶ層及び第Ⅷ層上面において検出された。

覆土は4層に分割された。第1層は粘性がやや強く、ローム粒子を微量含む暗褐色土、第2層は粘性がやや強く、焼土粒子と炭化粒子を多量に含む暗赤褐色土、第3層は粘性が弱く、焼土粒子を微量、ローム粒子を多量に含む褐色土、第4層は粘性が弱く、ローム粒子を多量に含む暗褐色土である。



1　暗褐色土層　粘性やや強し。ローム粒子を微量含む。
2　暗赤褐色土層　粘性やや強し。焼土粒子・炭化粒子を多量に含む。
3　褐色土層　粘性弱し。焼土粒子を微量、ローム粒子を多量に含む。
4　暗褐色土層　粘性弱し。ローム粒子を多量に含む。

0　(1：80)　2m

第46図　T1号特殊遺構実測図

本遺構に伴うと考えられるピットは計10個確認された。P_1は径27cm×34cmで掘込の底面からの深さが6cmで確認面からの深さが14cm、P_2は径28cm×34cmで掘込の底面からの深さが7cmで確認面からの深さが15cm、P_3は径32cm×35cmで深さ11.5cm、P_4は径73cm×84cmで深さ13.5cm、P_5は径72cm×99cmで掘込底面からの深さが8cmで確認面からの深さが14cm、P_6は径44cm×52cmで深さ11cm、P_7は径71cm×113cmで深さ8cm、P_8は径38cm×64cmで深さ10.5cm、P_9は径39cm×55cmで深さ15.5cm、P_{10}は径33cm×54cmで掘込底面からの深さが10cmで確認面からの深さが26cmを測る。なおP_4とP_7は、覆土の状態、や遺物の出土量から「炉」と考えられる。

プラン確認時には布掘式の掘立柱建物址と想定されたが、現時点では建物も想定できず、特殊遺構として取り扱った。

第13表　T１号特殊遺構出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法　量cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
45—1	坏	口径（15.5） 器高（4.5）	体部・口辺直線的に外傾	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外５YR5/6
45—2	坏		体部内彎気味に外傾	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外7.5YR5/6
45—3	坏		底部回転糸切り	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	10YR4/6
45—4	坏		体部内彎気味に外傾	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外7.5YR5/6
45—5	坏	台径6.3	底部回転糸切り 貼付高台	外面ロクロヨコナデ 内面ヘラミガキ・黒色	外５YR4/6
45—6	甕		頸部「コ」の字	内外面ヨコナデ	５YR3/3 10YR6/4

遺物は、土師器の甕と坏が出土している。45－６は頸部が「コ」の字を呈する甕である。45－１～５は坏で、何れも内面に黒色研磨がなされる。なお５は、底部回転糸切り後に高台が付される。

以上より本遺構の所産期は平安時代の前半に位置付けられる。

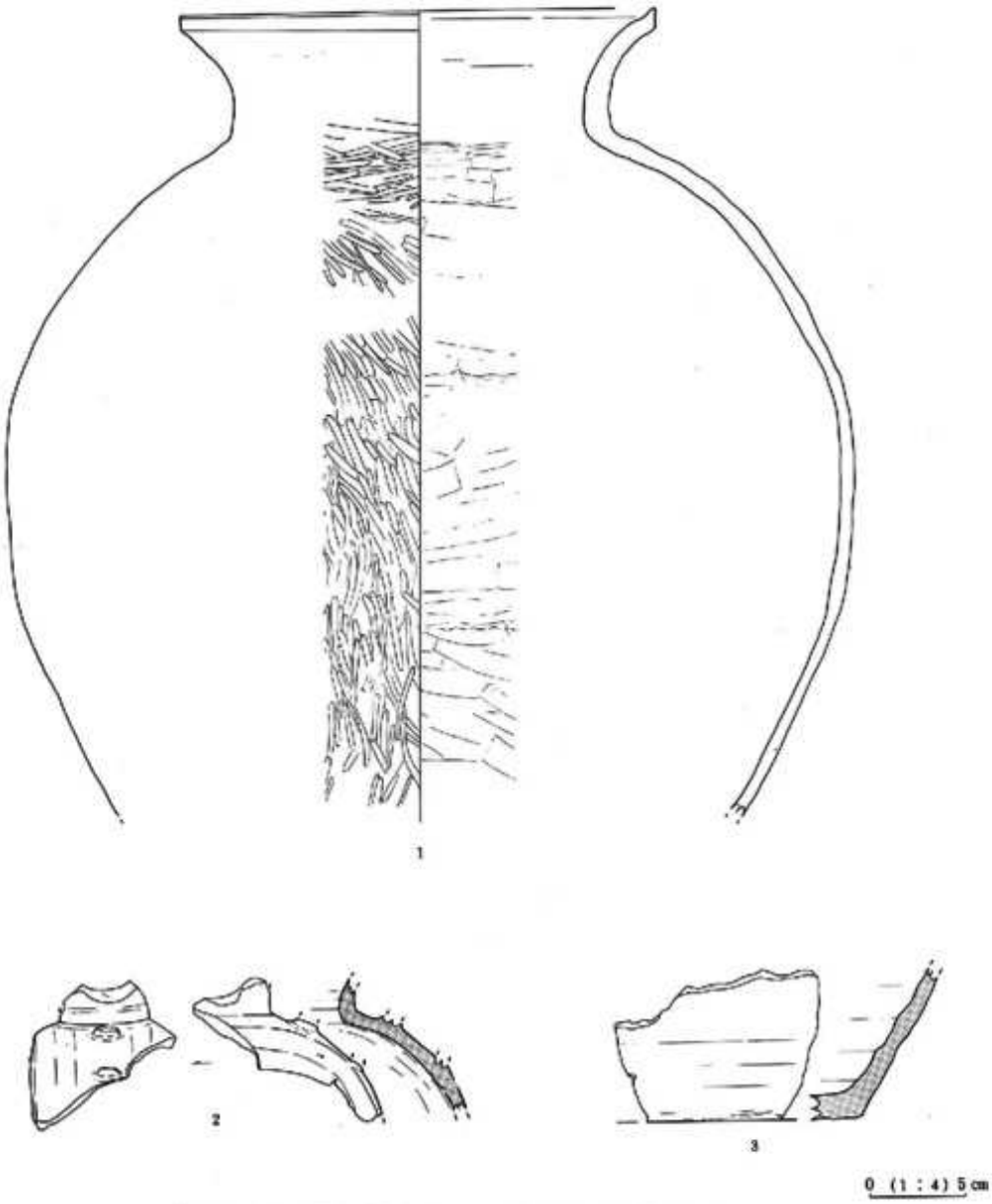
6　その他

1）グリッド及び表採遺物

グリッドからは、縄文時代中期の土器片、弥生時代後期の甕片・土師器の甕・坏・高坏片、須恵器の甕、坏、中近世陶器片等が出土している。47－２はお－３グリッド内より出土した須恵器の提瓶である。また47－３は表採した須恵器の甕の底部である。

第14表　グリッド及び表採遺物・Ｈ７号住居址出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法　量cm	形態の特徴	手法の特徴	備　考
47—1	甕	口径24.6 現高41.7 最大径43.8	大型の球胴甕 口縁部外反し、端部でやや直立する受口状を呈する。	口縁部内外面ヨコナデ 胴部外面ヘラミガキ 胴部外面ヘラナデ	7.5YR5/4
47—2	提瓶 （須）	―――		胴部回転ヘラケズリ	外 N4/0～3/0 内 N5/0
47—3	甕 （須）			内外面ロクロヨコナデ	外 N3/0 内 10Y5/1



第47図　グリッド及び表採遺物・Ｈ７号住居址出土遺物実測図

2）Ｈ７号住居址

Ｈ７号住居址は、調査区第Ｉ区（1987年度調査分）の東側の調査区外より、工事中偶然発見された住居址である。出土した遺物と切断面から、カマドは残存していると考えられる。なお全体図にその位置を、写真図版に切断面の写真を掲載したので参照されたい。

遺物は貯蔵穴より大型の球胴甕（47－１）のみが出土した。貯蔵穴内で底部を切断両側に向け

ており、工事の際底部が破損したと考えられる。なお出土した全ての破片が接合した。

所産期は古墳時代の後期の前半と考えられる。

第Ⅳ章　総括

芝宮遺跡群下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲから検出された遺構は、古墳時代後期の住居址2軒、平安時代前半の住居址2軒、古墳時代後期の掘立柱建物址2棟、時期不明の掘立柱建物址3棟、平安時代前半の特殊遺構1棟、時期不明の土坑5基、時期不明の溝状遺構8条である。前年度調査の遺構を含めると以下のようになる。

竪穴住居址	——	6軒	（古墳時代後期4軒・平安時代前半2軒）
掘立柱建物址	——	6棟	（古墳時代後期2棟・不明4棟）
特殊遺構	——	1棟	（平安時代前半）
土坑	——	12基	（縄文時代1基・古墳時代2基・不明9基）
溝状遺構	——	11条	（時期不明）

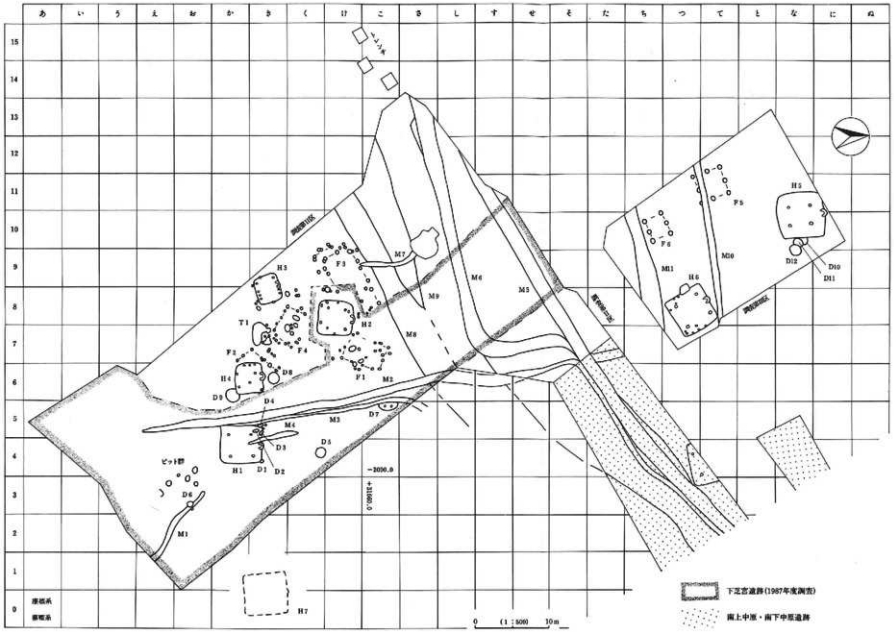
最後に、発掘及び整理調査に携わっていただいた方々に、心より感謝の意を表し、厚くお礼申し上げます。

（羽毛田）

参考文献

佐久市教育委員会　1980　『清水田』
〃　1981　『芝宮遺跡』（第2次）
〃　1981　『舞台場』
〃　1976　『市道』
〃　1986　『大井城』（黒岩城）
〃　1988　『大井城』（黒岩城・王城・石並城）
〃　1988　『芝宮遺跡』
〃　1988　『茂内口遺跡』
御代田町教育委員会　1987　『前田遺跡』
奈良市教育委員会　昭和62年度　『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』
高崎市教育委員会　1979　『正観寺遺跡群』
三重県教育委員会・三重県斎宮跡調査事務所　1984　『史跡　斎宮跡』

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982　『桜山窯跡群』
〃　1983　『後張』
㈶大阪文化財センター　1980　『陶邑Ⅰ』
前橋市教育委員会　1983　『端気遺跡群Ⅱ』
北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学研究所・千曲川水系古代文化研究所　1987
『第8回三県シンポジウム　東国における古式須恵器をめぐる諸問題』
浜松市教育委員会　1987　『伊場遺跡遺物編4』
静岡県考古学会　1979　『須恵器―古代陶質土器―の編年』静岡県考古学会シンポジューム2



第48図　下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ全体図（1：500）

H３号住居址（南より）

H４号住居址（南より）

H４号住居址遺物出土状態（南より）

H４号住居址カマド（南より）

H５号住居址（南より）

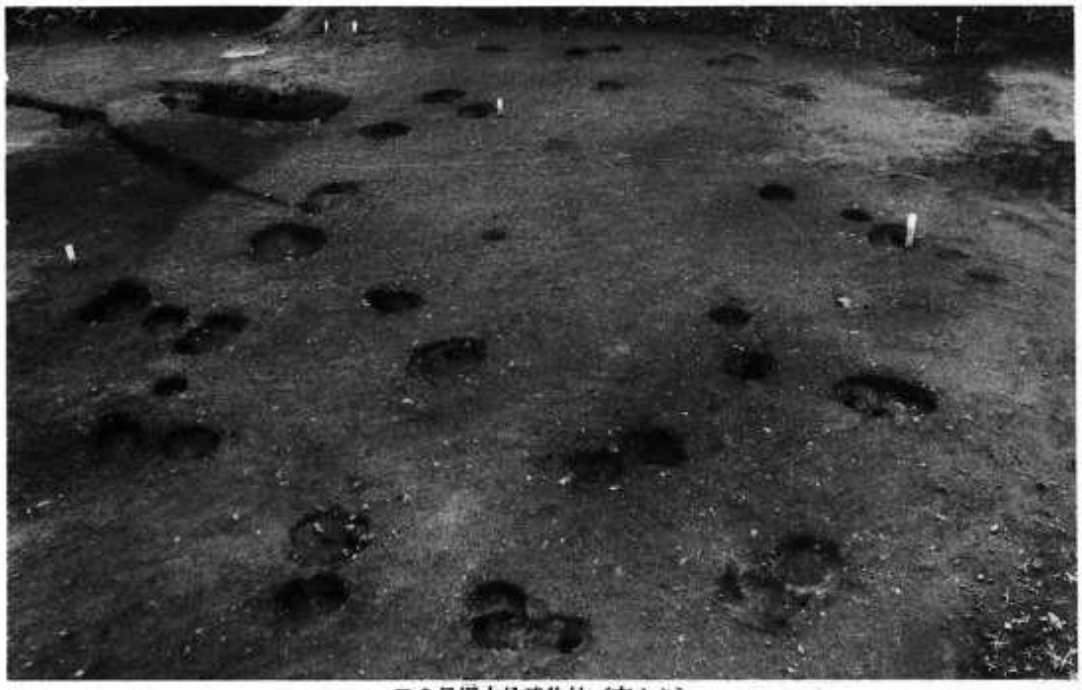
H５号住居址カマド（南より）

図版 四

H６号住居址（南より）

H６号住居址カマド（南より）

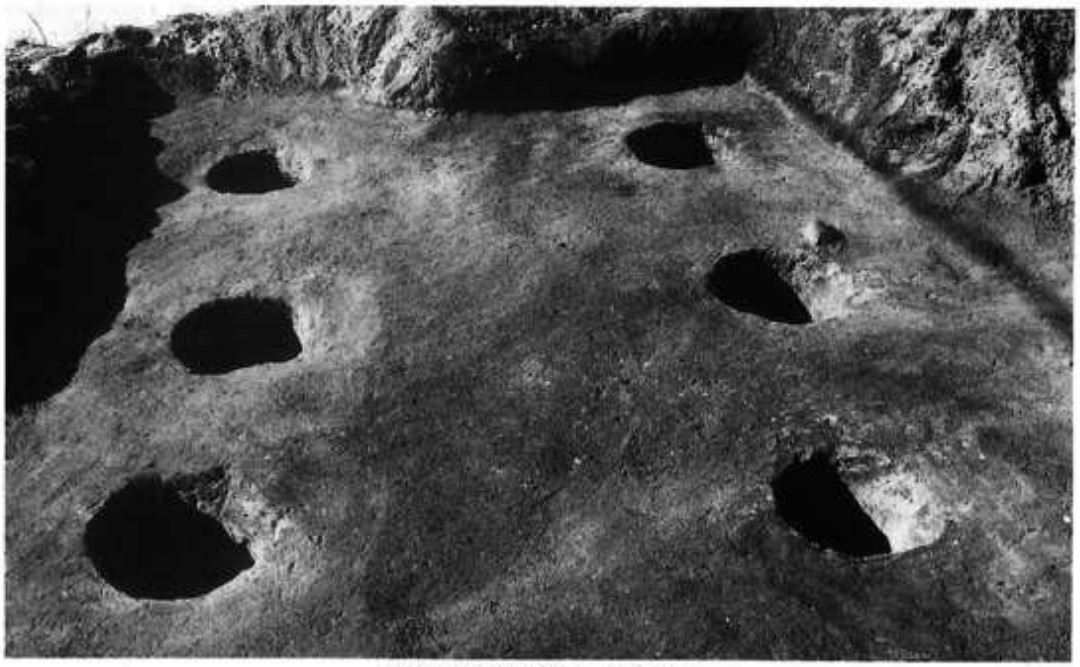
H６号住居址カマド掘方



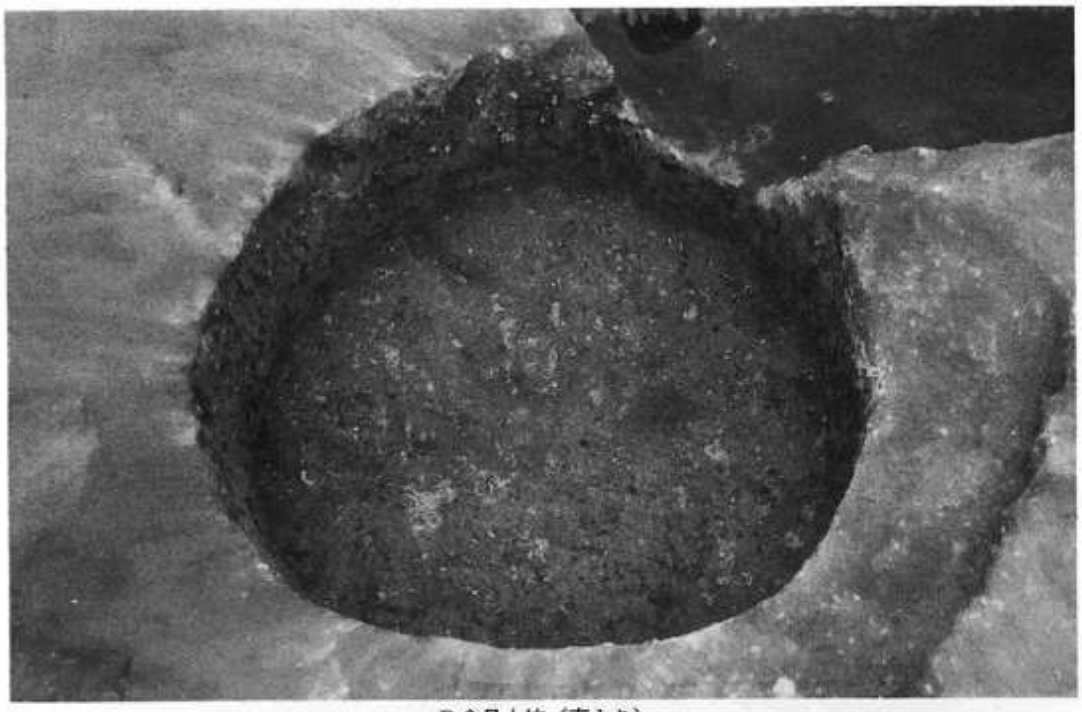
F３号掘立柱建物址（南より）

F４号掘立柱建物址（南より）

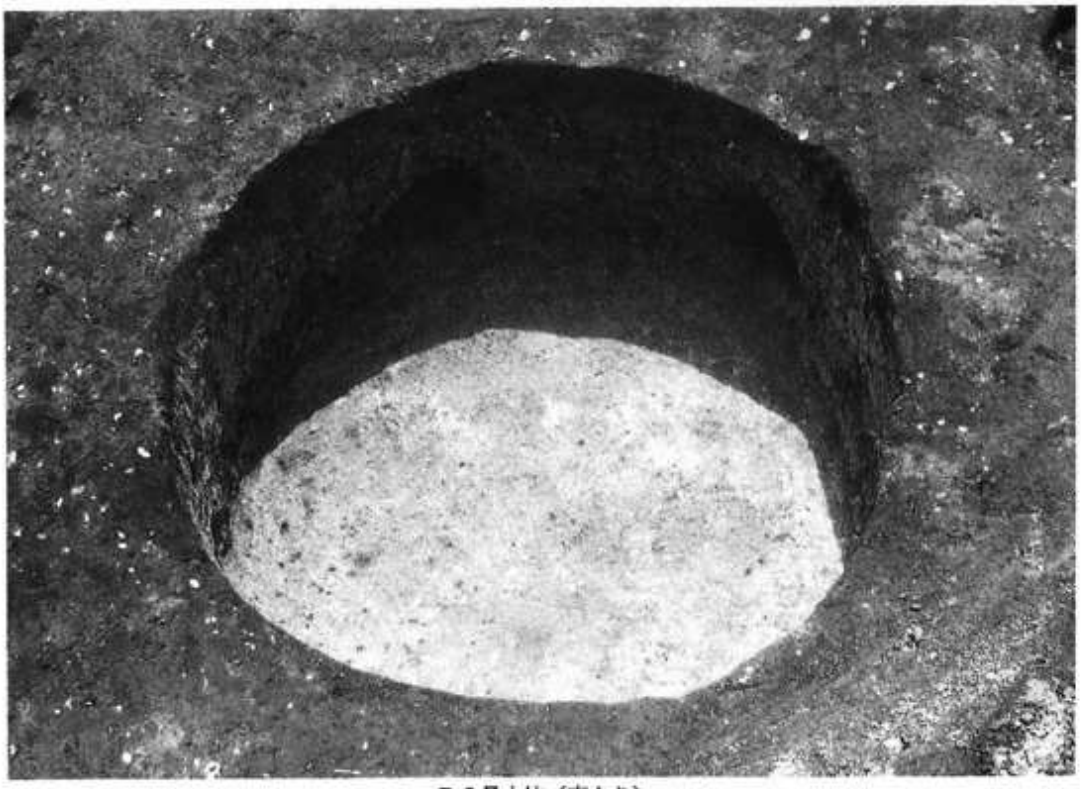
F５号掘立柱建物址（北より）



F６号掘立柱建物址（東より）



D８号土坑（南より）



D９号土坑（南より）

図版八

D９号土坑

D10号土坑

D11号土坑

D12号土坑

M２号溝状遺構

M６号溝状遺構

M6号溝状遺構

M7号溝状遺構

M8・M9トレンチ（北より）

M8・M9トレンチ（南より）

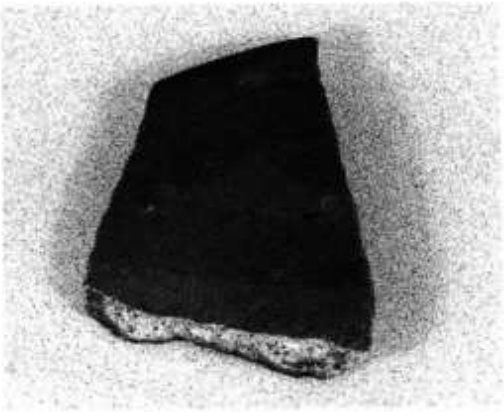
図版十

M10号溝状遺構

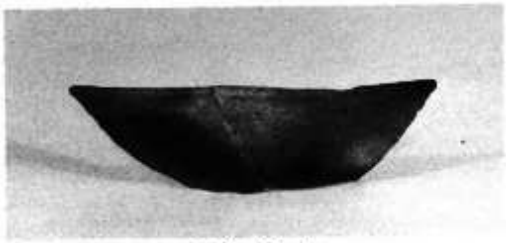
M11号溝状遺構

調査第Ⅲ区全景（南西より）

H3　6－1



H3　6－13



H3　6－5

H3　6－3

H3　6－4

H3　6－2

H3　6－11

H4　10－7

H4　10－12

H4　10－11

H4　10－8

H4　10－9

H4　10－2

H4　10－1

H4　10−19

H4　10−18

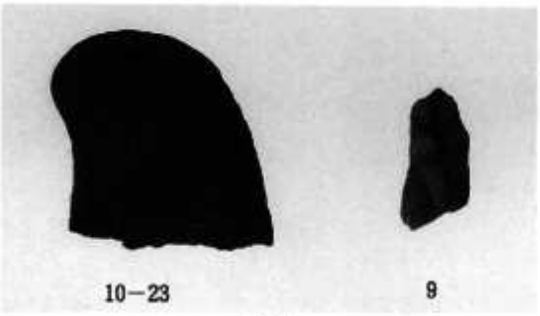
H4　10−21

H4　10−3

H4　10−22

H4　10−13

H4　10−5



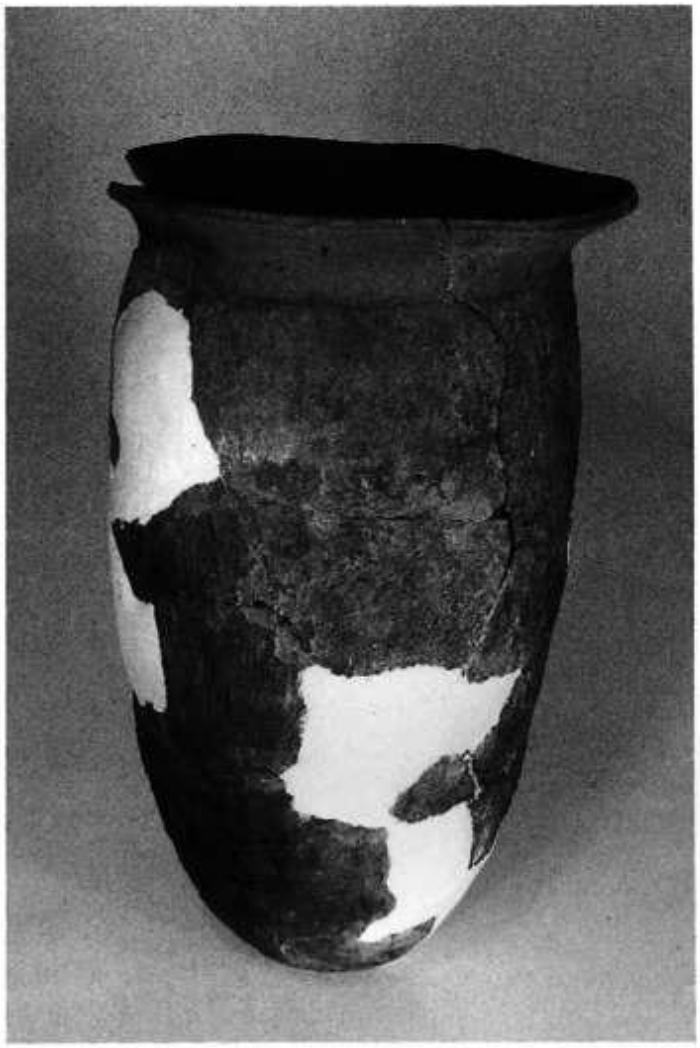
10−23　　9

H4

H5　13−5

H5　13−6

H5　13−7



H 5　19－1

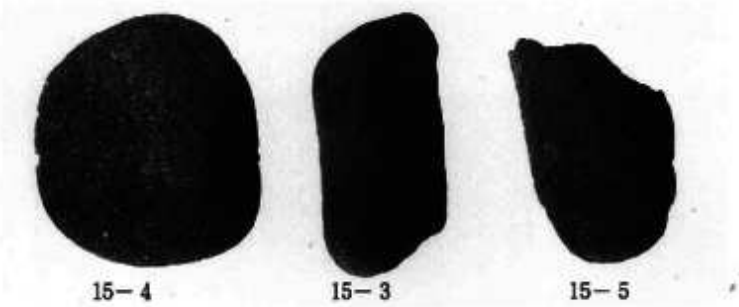
H 5　13－3

H 5　13－2

14－1

15－7

H 5



15－4　15－3　15－5

H 5

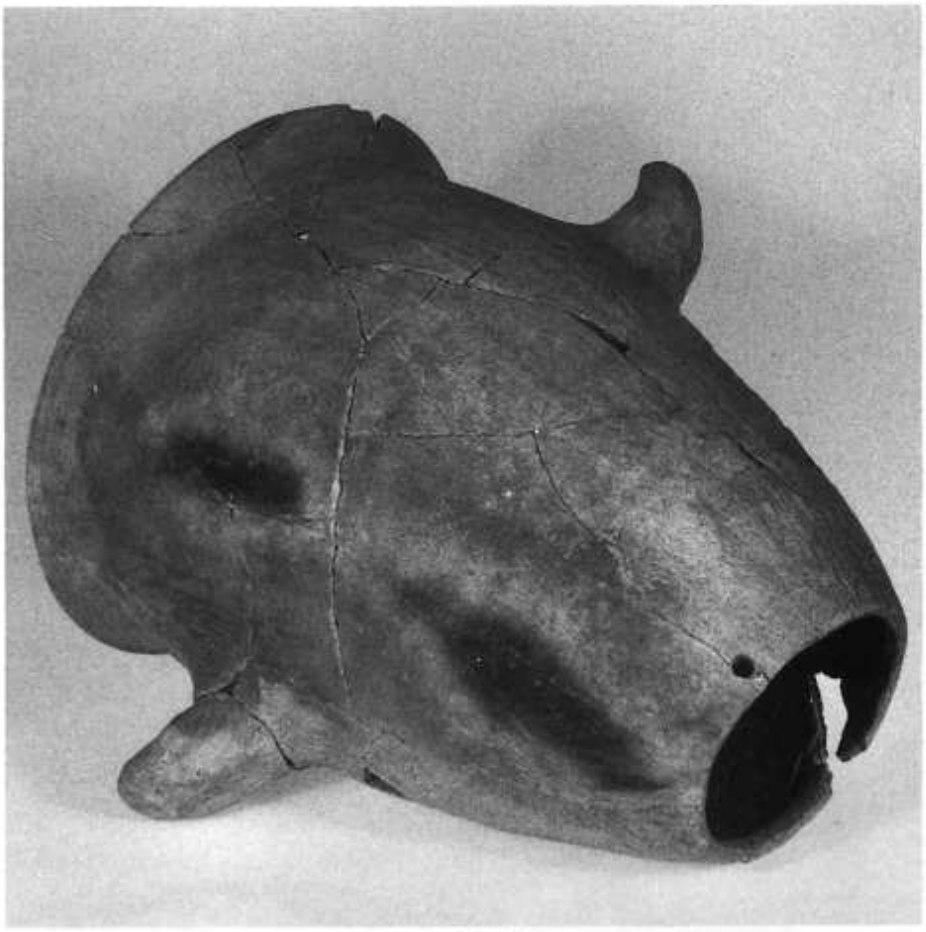
H5 13－4

H6 21－15

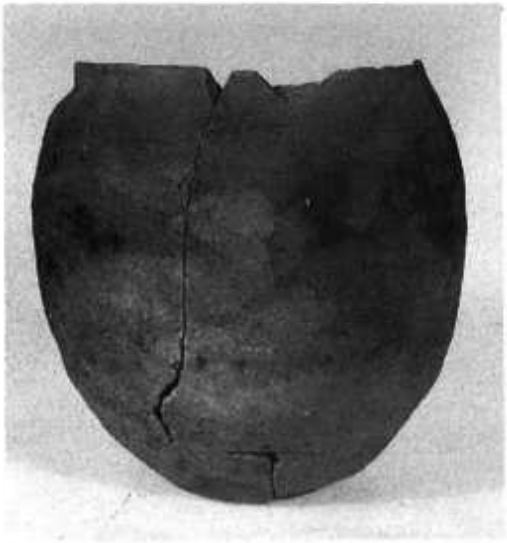
H6 21－11

H6 21－13

H6 21－14



H 6　21－11



H 6　20－8

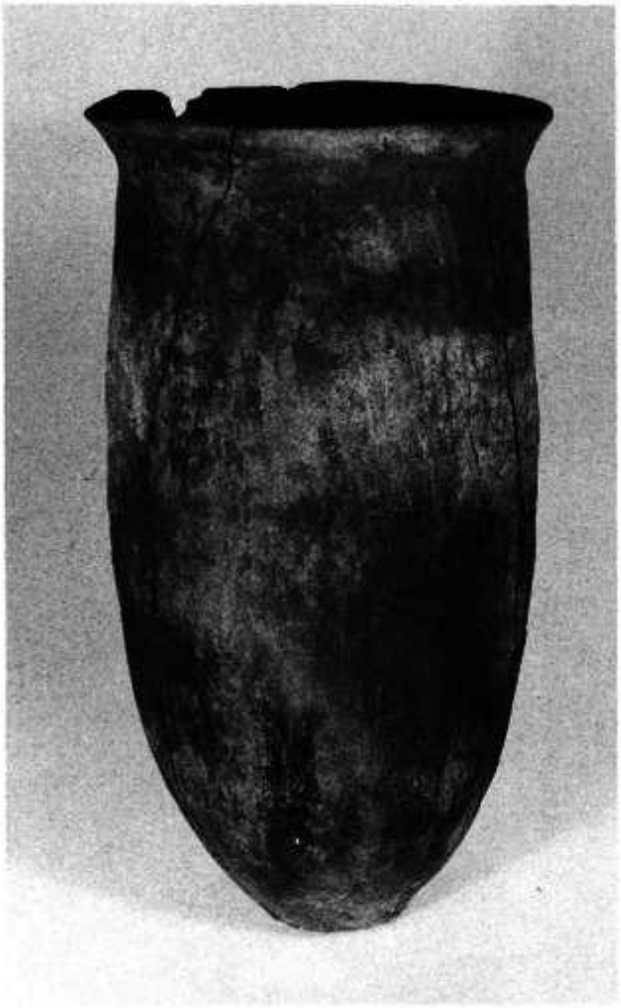
22－5

H 6

H 6　20－5

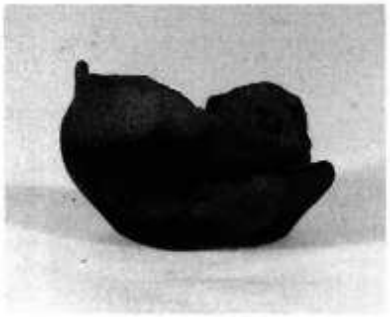
H 6　21－20

H 6　21－17

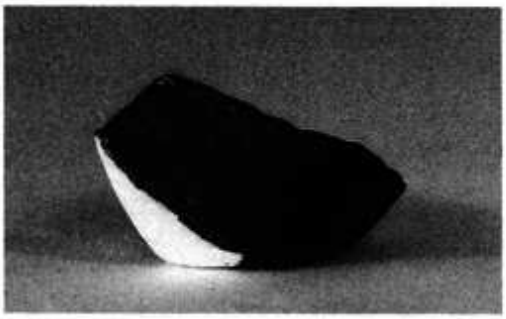


H 6　19－2

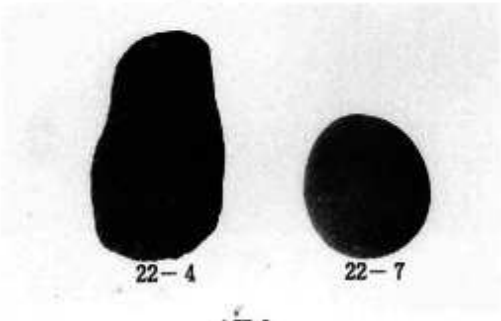
H 6　21－16



H 6　21－18

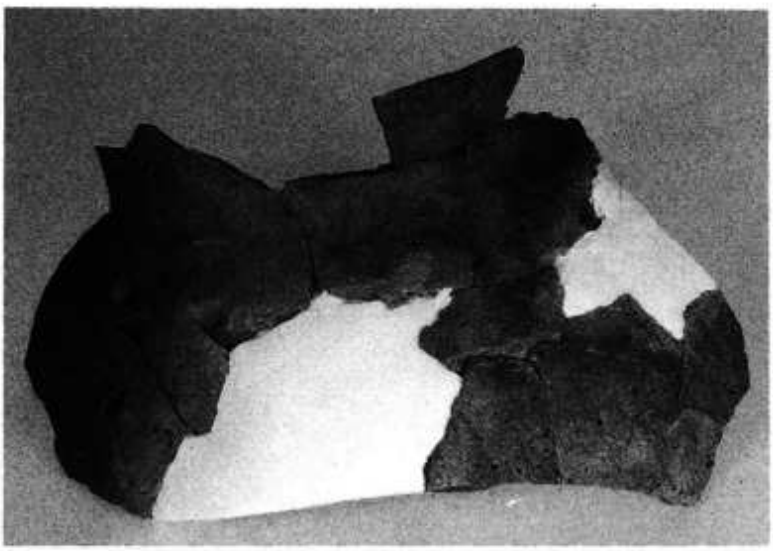


H 6　21－19



22－4　22－7

H 6



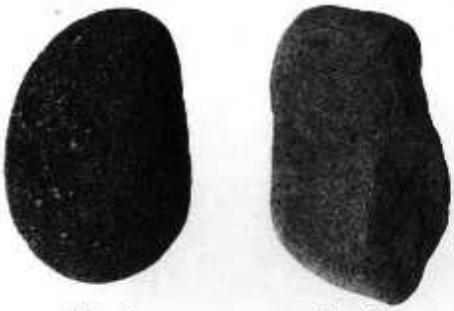
H6 20－6

H6 19－3

H6 20－10

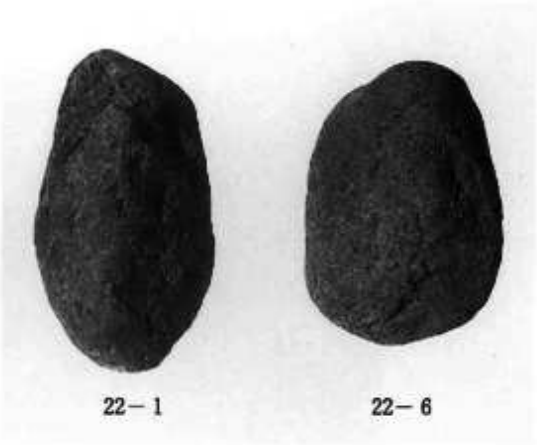
H6 20－7

H6 20－9



22－3　22－2

H6



22－1　22－6

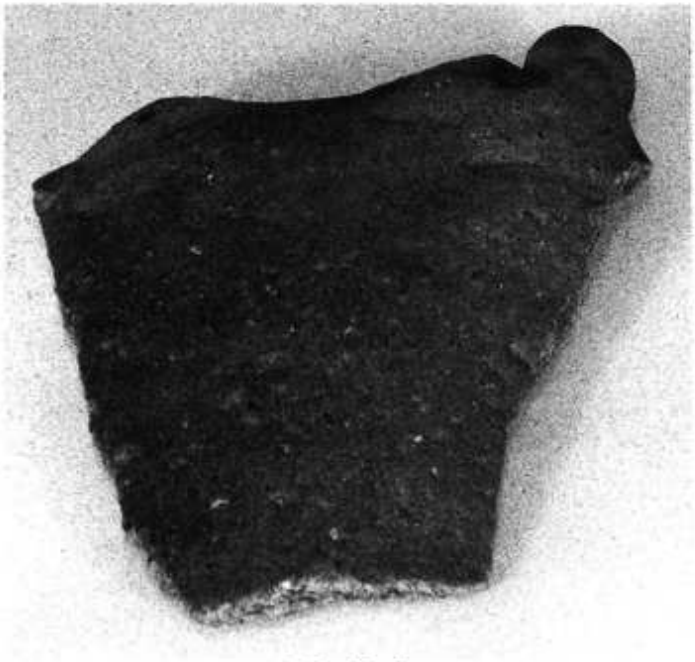
H6

H6 21－12

T1 45－5

M2 35－1

グリット 47－2



M 8　35－3

表採　47－3

H 7　47－1

Ⅱ地区　調査スナップ

Ⅲ地区　トレンチ

H 7 号住居址

上大林遺跡より対岸の下芝宮遺跡を臨む

芝宮遺跡群

下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ

長野県佐久市長土呂下芝宮Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書

1989年3月

編集者　下芝宮遺跡Ⅱ・Ⅲ発掘調査団

発行者　佐久市教育委員会

佐久市大字中込3056
電話0267－62－2111㈹

印刷所　株式会社　櫟〈いちい〉